

蹴 球

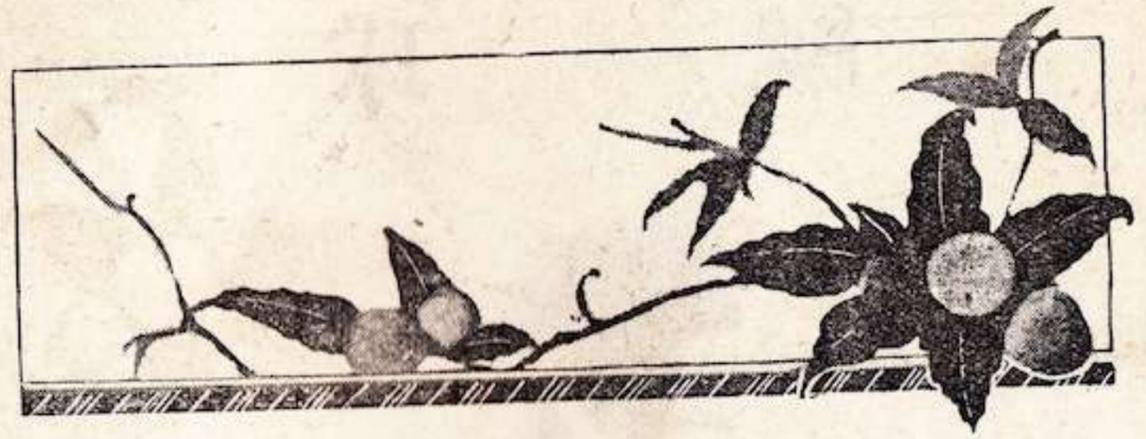
第 七 號

昭 和 十 五 年

東京商科大学蹴球部誌

蹴 球





目次 第七號

卷寫屏
頭言眞……………早野廣太郎

特別寄稿

一橋蹴球部の強化を祈る……………蹴球協會々長 深尾隆太郎(1)

送別文

六兄を送る……………早野廣太郎(3)

部員感想

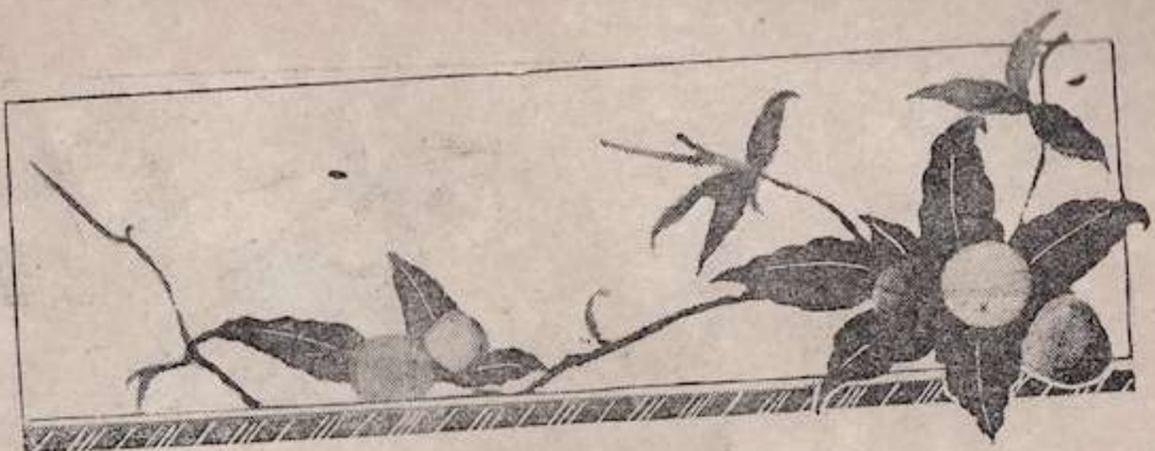
斷想……………金井雄吾(6)
無球一路……………堀尾貞一(7)
無題……………早野廣太郎(8)
思ふまゝに……………吉澤貞雄(10)
隨想……………荒川守之助(12)
こんなことを思ふ……………吉田富彦(14)
部誌について……………清水陸(16)
不悟辨……………石割知之(16)
隨想……………高橋道太郎(19)
蹴球部の個人主義……………折木英二(24)

先輩寄稿及通信

夏目斷片……………松岡義彦(27)
隨言……………片山孝次(29)
無題……………藤塚亮策(31)
一日蹴球を想ひ感あり……………山田久寧(33)
無題……………居川達一(35)
思ひ出づるまゝに……………淵上明(35)
隨處隨想……………水島行(36)
無題……………村木杉太郎(37)
優曼華の獨言……………宮澤力(38)

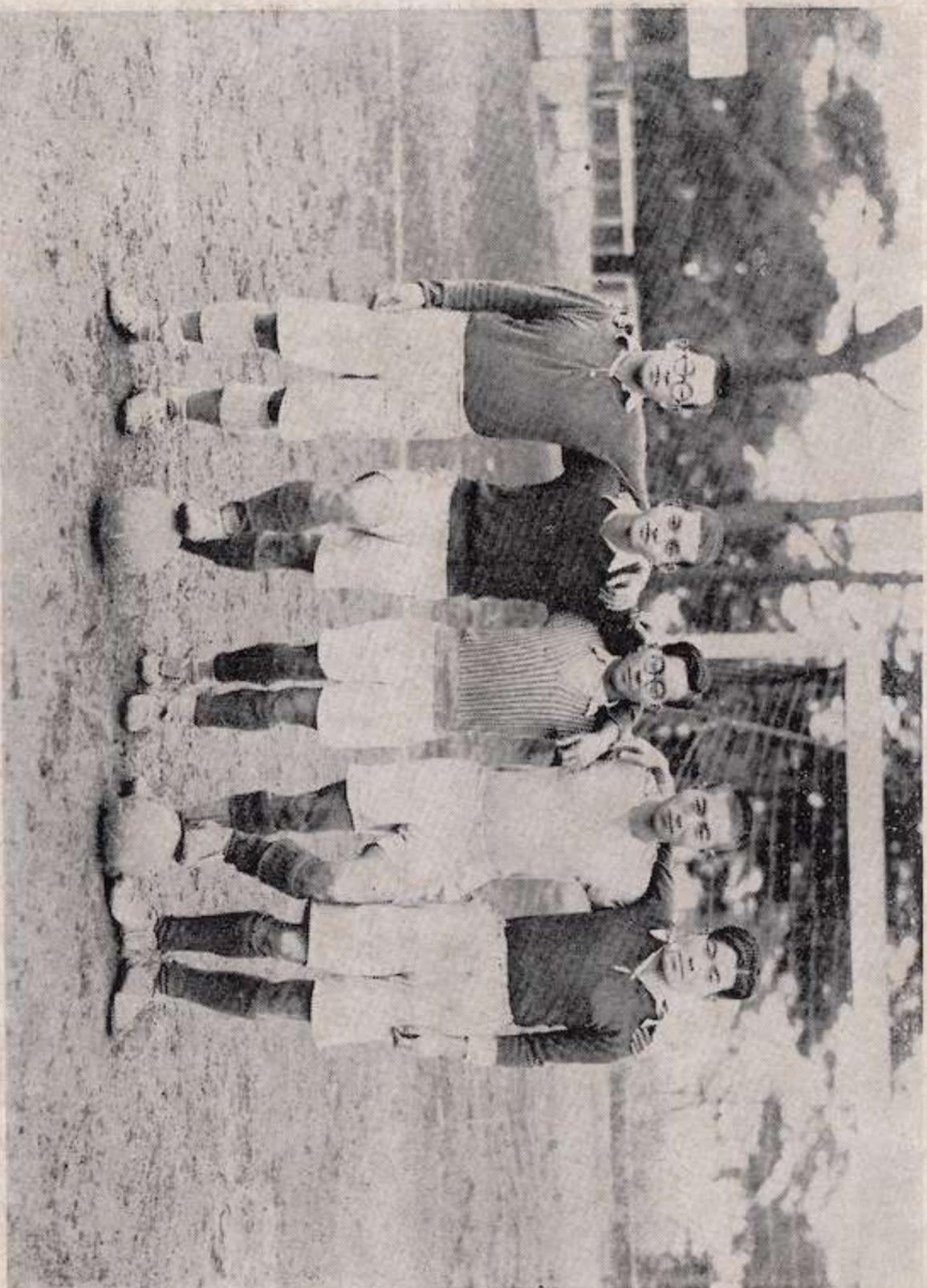
部員感想

通信……………豊田達治(40)
通信……………二階堂謹司(41)
通信……………水島茂(43)
通信……………枝村藤三郎(47)
雜念……………大樹隆久(48)
部誌の歴史……………村井恒典(55)
通信……………後藤虎雄(60)
通信……………神野清一郎(62)
浦高戦を終へて……………青木育郎(64)



編輯後記	名簿	戰績	無題	無題	僕の言ひたい事	生活といふ事から	僕は何を書かうとしてゐるのか	入部所感	所部の感	休部の感	断部の想	私生活	無題	反省の不足	感雑念	無題	感想	
.....
(94)	(88)	(79)	高橋三善 (77)	五月女俊三 (77)	荒川正三 (75)	遠藤英一 (74)	内田清比佐 (73)	助川浦實 (73)	松原龍平 (72)	笠原賢三 (71)	太田義夫 (70)	白鳥碩男 (69)	西内興三 (69)	安田文之介 (67)	古賀五郎 (67)	士屋俊雄 (66)	瀬藤敏夫 (65)	吉岡 (65)

新卒業生



狩森 池尾 米山 二階堂 若瀬

新 卒 業 生



狩森

池尾

米山

二階堂

菅瀬

昭和十四年度部員



左より 第四列 藤塚、片山、水島
 // 第三列 堀尾、菅瀬、居川、青木、太田、山田、村木、金井、二階堂、松岡
 // 第二列 吉田、安田、折下、早野、白鳥、西内、米山
 // 第一列 清水、荒川、鈴木、宮澤、瀬藤、狩森、淵上、池尾
 (他に 小西、石割、吉澤、高橋、山本、吉岡、山地、鷺野、古賀)

蹴球を通じて
われわれの心である
生成して行く

第七號

昭 和 十 四 年 度 部 員



左より
第四列 藤塚、片山、居川、青木、太田、山田、水島
第三列 堀尾、菅瀬、折下、早野、白鳥、西内、村木、金井、二階堂、松岡
第二列 吉田、荒川、鈴木、宮澤、瀨藤、狩森、米山、淵上、池尾
第一列 清水、小西、石割、山本、吉岡、山地、鷲野、古賀
(他に)

卷 頭 言

早 野 廣 太 郎

我々の蹴球部は生命を持つ、それは遙か遠く創立の時に力強く生れ出でたのだ。爾來幾多の先輩の血潮が此の尊い生命を育んで來た。今は亡き荒井先輩が彈丸の降る下で部の發展を想ひ、暗夜乏しき燈火の傍で部の優勝を希つて居られた烈々として、純情なる闘志は我々の胸中に深い感激を呼び起さずにはをらぬ。

我々は今や此の傳統ある生命の脈々たる鼓動を聽く。それは、『汝等闘ひ而して勝て』と叫ぶ。生命あるものは發展する。進むものはあらゆる困難を超えて、そして闘はねばならぬ。遂に打勝たねばならない。

三十有餘名の心が一にとけ、漲る闘志によつて白熱に燃えた時、我々の進路は自ら明とな

る。此の光の下、肅々として眞摯に、暗夜の道を我等は行く。何ものをも恐れず、何ものにも屈せず、凡百の俗事を遙か彼方に眺めつゝ、剛氣の心もて我等の軍は進む。蹴球一路!! 闘ひを求めて、勝利を逐つて茨の道を前進せねばならぬ。

愈々秋のリーグ戦だ。我々は此の商大蹴球部の生命を眞紅に燃やして敵にぶつかつて行くのだ。猛練習あるのみ。

今や蹴球部の生命は洋々として流れてゐる。先輩の血涙と歡喜とを河床に秘め、現部員の精進と來るべきものゝ誇とを孕んでゆく。岸邊に立つ旅人には黙して語らざるも、身を水中におく我々はそこに商大傳統の聲を聽く。

闘ひは始つた! 我々の全精力を動員すべき秋が來たのだ。全部員一致協力、搖ぎなき團結力と、血のにじむ如き猛練習と、そして燃ゆるファイテンゲ・スピリット、を以て敵に眞正面から當つてゆくのだ。倒れても力ある限り我等は闘はねばならぬ。その時こそ、商大蹴球部の生命が夢にも忘れなかつた勝利の鐘の音を聽く事が出来るであらう。

一橋蹴球の強化を祈る

男爵 深尾 隆太郎

明治三十年頃迄は一橋の運動部は端艇部のみであつて、一橋のスポーツ精神は漕艇に依つて養はれて居たのであつた。其頃庭球同好の者が出来庭球を始めたがコートを作る資金もないので、運動場の一角に棕櫚繩を以てラインを作り、ラケットも新舊大小不揃の物を以て幼稚なゲームをやつて居た。三十一年の暮であつたと思ふが、高等師範より對校試合の申込があつたので、十數組を編成して筆者も其末位に伍して高師のグラウンドへ出掛けたが、丸で小供と大人の角力の様に零敗を喫して歸つて來た——今日の世界的選手山岸二郎君の父君慶之助君も當方選手中には強い方であつたが、此時の惨敗組であつた——それから一同奮起して種々奔走資金を集めて正式のコートも出来器具も整つて熱心練習の結果翌年は雪辱をなし、後半に至つては一橋制覇時代を見るに至つたのであつた。

其頃一橋の學生は才氣煥發と共に稍老成の風を感じられた、吾々スポーツ連は今少しく剛毅朴訥の味を加へ度いと念じて居た、之は數年にして社會人となる而も主として經濟社會人であり、其社會は才氣と敏俊とが重ぜらるゝ所と解せられて居た爲に自然に斯の如き風を來したものと考へらるゝのであつた。併し今日に於ては大學となつて其風

は大に改まつた様に思はれるが、尙一段の工夫精進を以て各人大人物の風格を備ふるに至らんことを切望するのである。其理由は今日に在つては武力戦争の場合に於ても、所謂國家總力戦と唱へらるゝが如くにて國力充實の良否が勝敗の分岐點であるのである。即ち經濟は國家の存立發展の中心となるに至つた。從來は政治が經濟を指導したが、今後は經濟が政治を支配せねばならないこととなる。従つて從來の經濟人は自己の經營する經濟事業の盛衰の責に任ずれば足れりと思はれて居たが、今後は主なる經濟人は國家の隆替を双肩に担ふの重責を課せらるゝに至つたのである。故に經濟人たる者は常に犀利明敏なるのみならず冷靜透徹剛毅果斷の性格を多分に要する次第と考ふるからである。而して大多數の人々は大學の門を出る頃には其性格概ね固定しうるものであるから、此間に十分の陶冶鍛鍊を必要とするのである。

人格の陶冶は讀書により又先輩の指教により其進境を見るものであるが、スポーツの如き肉體の鍛鍊より進む途もある。殊に精神と並んで身體の強健は極めて必要のものであるから、心身兩面の鍛鍊としてスポーツは頗る有意義なものである。就中蹴球漕艇の如きチームワークの競技は一人の不覺は全體の敗因となるのであるから、其責任感の如きも個人競技に比し一層強烈なものがあつて、従て心身鍛鍊に最適當であると考へて居る。それ故我一橋に於て近年蹴球部が設けられ、累年其力を増し今日はリーグ戦第一部に加はるに至れることは慶賀の至りであるが、漕艇は連年の苦心が酬ひられて優勝の地位を占めたのであるから、蹴球も今一層の努力を以て第一部に於て優勝を續ける迄に發展強化せられんを切望に堪へぬ次第である。

而して其結果の顯れとして二十年三十年の後には、一橋出の總理大臣及内閣々僚が多數輩出する様になる事が期待せられるのである。

送別文

六兄を送る

早野廣太郎

今春我々の部は小西、二階堂、米山、菅瀬、池尾、狩森の六先輩を社會に送り出した。現に筆を執つて兄等の事を回想すれば、蹴球部員として、又個人的な意味に於ても、六兄に蒙つた恩の大なるを感じ、新なる感謝の念が湧いてくるのである。

我々本三の連中が豫科一年に入つた時、先づ驚いたのは上級生が皆一癖有り氣な様子をしてゐた事であつた。顔色あくまで黒くグラウンドを縦横に驅けて味方を激勵するが、然も大きな眼の底に深く理想を追求する熱情を秘めてゐる小西さん。如何なる困難に遭つても豪氣以て之を突破する二階堂さん。常に緻密に計畫を樹て、眞面目に之を實行し近來の名マネージャーと謳はれた米山さん、ギリシャの戦士を偲ばせる池尾さんと、靜なる事林の如くなれど猛烈な突進力を持つた菅瀬さんはF、W、をリードしてゐたし、後陣を一手にその熱情を以て引受けてゐた狩森さんが又部の中で異彩を放つてゐた。我々新入の部員どもが驚いたのは無理もない。

爾來五年の歲月は流れ、今や六兄を送る言葉を書かねばならぬ。感慨無量である。蹴球部で生れ、蹴球部で成長し

た男兒六人を社會に送る事の壯快と誇とを感ずると同時に、別離の情惻々として胸に迫るのを覺える。

我々が六兄を送るに際し特に感銘を深くするのは、此等の六人の方々が皆夫々獨特の風格を持つて社會に出られたといふ事である。小西には獨特の小西らしさがあり、二階堂には確乎たる二階堂らしさがある。他の諸兄も夫々此のらしさを有して卒業された事は、蹴球部そのものゝ性格を物語つてゐると同時に、學生々活の何物なるかを暗示してゐると見られやう。

凡そ社會に生活する人間は、各人が夫々の世界を持つてゐる事は多言を要しない。重要な事は、その世界が幅と深さとを具有し、確乎たる地盤の上に建設されてゐるといふ事であらうと思ふ。有爲轉變の世の中に對し、自己を律する原理ともいふべきものを明確に把握した曉には、そこにその人独自のらしさが生れるものと考へる。それは激流を進み、又大海をゆく船の棹とも楫ともいふべきものである。今や六つの小舟は蹴球部といふ岸邊を離れて大海へと乗り出した。各人がよしと信ずる方向にむかつて、その艦に坐して楫を操る男の面上に、我々は斷乎たる信念の存するを見る。信念を以て萬事に處せんとする風の裡に我々は蹴球部の本質をみるのである。

今や世界の情勢は混沌としながらも、信念を以て行動するものゝ勝利は次第に明になりつゝある。東亞新秩序の建設を目指す日本が、過去の歐米依存を排して自律的行動に出てゐるのも日本自體が自信、信念、力、を有して來た事を示すに外ならぬ。日本が世界を指導し、形成してゆかんとする所に、我々の使命を痛感するのである。兄弟六人の若人達よ。常に蹴球部で養つた精神力を以て社會の荒波と闘つて戴きたい。

後に残つた我々は兄等の遺された尊い傳統を益發揚進展せしめ、一致團結して闘つて行かうと思ふ。常に變らざる御指導をお願いする次第である。

愈お別れの時が來たやうである。進む者と留る者との間には常に人生の別離の悲が存するのではあるが、又見方をかへれば、人生流動發展の相でもあらう。吾々は岸邊に立つて兄等の壯途に對して心より祝意を表したい。漸く風も

加り兄等の進路には計り知れざる困難があるであらうが、常に確乎として抜くべからざる信念を以て進まれん事を祈る。

蹴球部を故郷と呼び、蹴球部で生れ、その中で育つた六兄の門出に當り兄等の頭上に常に理想の星が輝ん事をねがひ、一言以て送別の微意を表した次第である。



部員感想

斷想

本三 金井雄吾

◇「味」

甚だ年寄染みて失禮ではありますが、自分は最近「味」といふ事を切りに感じる。

人生は總て「味」だ、と言つて了へば其れで盡きる様なものだが、切實に感ずる時には其れを其儘で遣り過せない。「味」は人生の經驗から生じると思ふ。即ち味はつて始めて分るものだ。意義を持つた人生の結實は文化となつて、生まれ人皆文化無しには生き得られないが、

の蹴球だ。此の苦しい道も自分にはやつと最近になつて「味」として進み得る様になつた。苦を樂として感ずるに自分は五年間といふ年月を要したのだ。小生の蹴球生活意義ありたりと言ふ可きか。

◇深穩

早野兄よりの借用書たる秋窓記に「深穩」なる題章がある。阿部次郎氏は此言葉を次の如くに解して、心の持方の理想としてゐる。即ち深穩とは深味のある穩かさであつて、深味によつて其性質に特殊な風格を帯びるに至つた穩かさである。深穩の境地に到達するに至つて、氣骨と主角とを缺いた穩かさとなり、而かも煦々たる好日の如き靜かな輝きを放つ、といつた性質を指す、と。

小生の如き單純、短氣なる者こそ斯る境地に入るを冀ふのであつて、世の事象總てを慨憤の目を以てのみ批判せず、客觀的妥當性を持つた批判を爲し得るのであらうと思ふ。

此境地は蹴球といふ烈々たる氣魄を養成するものと背馳する如く考へられるが、決してさうではなく、此兩精

此の文化たるもの結局は人生の味の客體であり、且つ味の所産である。其反面に我々は粗野に大なる「味」を見出だす。又此れ無しにも生きて行けない。

蹴球をやるのも「味」を求めてゐるのだ。ゲームだから闘争に勝つといふ粗野の面を目指してはゐるが、其過程には様々の文化的要素としての「味」を含んでゐる。

然し此の「味」を味はふには何よりも苦難といふ條件が附纏ふ。而かも其の苦勞は自分一個の苦勞の他に團體の苦勞を含んでゐる。さうして此等の苦勞を忍びつゝ遙かの彼岸にある大なる目的に向つて邁進せねばならない。

此の遠くて辛い道を一步一步踏しめて、全員心を一にして、而かも先人の残した歴史と傳統を背負ひ且つ之等に勵まされ乍ら、眞實を一路直行するのが商大サッカー部

神は楯の兩面であつて、唯其の發現する場合によつて、其の何れかゞ發揮されるものと思ふ。勇猛無比の古武士が茶道に親しみ、或は禪に依つて自己を磨いたのは上の事をよく證明してゐると思ふ。自分は蹴球を通じて深穩なる性質を得可く修養を積み度い。假令餘す所僅か半年の商大蹴球生活であらうとも。

無題

本三 堀尾貞一

部誌の原稿は毎年自分にとつて苦痛の種だ。第一に私は文章が下手であるその上頭腦のレベルが低いから何を書いてよいか判らない。只現在考へてゐる事をそのまま述べるより外はない。それも上手に表現の出来ないのは勿論である。

さて、現在私の考へてゐる事は人間ばすぐ物事に結論をつけたがるが、多少氣長に又大きくそれ等を見る事が必要ではないかと云ふ事である。

少くとも、私にはとても結論が見出せない、蹴球を六年間やつた後で「蹴球生活六ヶ年を省みて私は……」等云ふ迄には到らないと思ふ。

只、私に判つて居り、又信じて居るものは。その方法であり、その道である。私は六年間蹴球を一所懸命続ける事により、否一生その精神で生きる事により何物かに到達出来ると信じてゐるのみである。

私は前に述べた如く言葉は上手な方でないので、一生に一度は名言を吐かうと考へてゐるのだが「自分の一生は斯く〜であつた」等云へるのは恐らく死んでから冥土で云ふ事であらう。

蹴球一路

本三 早野 廣太郎

過去五ヶ年間の蹴球生活を振り返つてみる時、豫科に入學したのが昨日のやうな氣がする。その間自分が歩んで來た道はいつも何等かの意味で蹴球部に關係を持つて

あつたら男らしく他の道を進んだ方がよいのである。

我々の部は仲良くやつてゆく事が、試合に於ても練習に於ても最も必要であると信ずる。仲良くといふのも單に遊び友達といふだけを意味するのではない。時には眞劍になつて喧嘩してさへもよいのである。蹴球部はあらゆる矛盾を大きな愛でつゝむ所の聖なる場である。それは生命を持ち、活々として天地の間に生き續けてゆく。

蹴球部が静寂にして動かさる時は愛の境地であり、斷乎として突進する動的なる時は闘ひの世界である。

此の意味に於て愛と燃ゆる闘志が蹴球部の根元とみられやう。何時のときにも此の事が忘れられたなら、それは我々の墮落と知るべきである。單に外面的な交渉のみで能事をはれりとする者は、蹴球部の傳統精神が何であるかを三省してみなくてはならぬ。我々の間は單に喜を俱にするのみではない。悲みも苦痛も互に背負つてゆかなくは、よい蹴球部は出來る筈がない。ましてや一部優勝などは幻に過ぎなくなるであらう。

蹴球をやる以上、六年間練習を續け相ともに勵し合ふ間柄にならなければ部に居る價値はない。部に六年間居る事自身が部員としての缺くべからざる條件であると

ゐた事を思ふと、今更ながら蹴球部に蒙つた恩の大なる事を感じる。

私の喜びも、悲しみも、殆どすべてが蹴球部といふ大きなものにかゝつて來たのである。豫科時代、豫科リーグ或は全國高商大會の優勝に味つたあの感激、二部に陥落した時、神宮競技場の控室の前で、今は亡き荒井さんと相擁して來年はきつと全勝して一部の檜舞臺に戻つてみせるぞ、と誓つた時のあの氣持も私は生涯忘れないであらう。

私の歩みは牛の如く鈍く或る時は退歩したし、或る時は右へ左へと傾いて曲つた道を進んで來たのであるが、要するに蹴球部といふ大きな母の懷に抱れてやつて來たのだといふ感じが深い。私の同僚諸君も恐らく皆同じ感慨を持つて居られる事と思ふのである。大いなる愛に甘えながら、時にはそれに反抗し乍らも、遂に此の愛の下に行かざるを得なかつた我々はそこに蹴球部のよさを、言葉では表現出來ぬが體驗して來たのである。蹴球部を愛する事が出來ない人間は潔く部を去るがよい。蹴球部にゐる事が負擔であり、何か義務的な感じを受ける人が

時に、私のいふ蹴球一路の生活がなければ、そして眞摯なる練習と生活とがない以上それは本當に蹴球をやつてゐるとは申されぬ。部を途中で止める人が往々にしてある。此等の人々には多くの言分があるであらうが、我々から云ふ蹴球一路の氣持は分るまい。蹴球と平行して勉強するのではない。學生の本分としての勉強といふも、人間としての自覺といふも、我々にとつてはそれらが蹴球部の生活と全く一のものとなつてゐるのである。蹴球する氣持と勉強する精神とは同じ血潮が流れ、同じ根によつて支へられてゐるのである。端的に云ふならば、我々の一擧手一投足に蹴球部らしいさがにじんであなければならぬのだ、と信じてゐる。蹴球部的な風格を確乎として築かねばならないのだ。

今度の事變が始ると同時に我々は大學生々活を發足した。その間所謂インテリの無氣力とか學生の無氣力とか論議せられた。併し世にインテリと稱せらるゝ人々が、一度戰場に立てば十二分の働をなしてゐる事が次々と報告されてゐる。問題は平素の生活と戰場に於る勇敢なる行動との間に一貫した原理ともいふべきものが明瞭

でないといふに在るらしい。だが我々の先輩をみると蹴球部で張切つてゐたのと同じ氣持で軍隊で、或は社會の第一線で頑張つて居られる。こゝに我々の部の面目がある。茲に蹴球一路の端的な表現をみる。學生時代蹴球部の傳統的精神で萬事を處したのと同様な原理の上で、社會に於ても戰場に於ても行動せられてをるのである。かくあればこそ蹴球部は先輩も部員も一緒になつて試合をするのだと本當に云へるのである。先輩の方々がリーグ戦を應援して下さる氣持、我々本科生が豫科の浦高戦を熱狂して應援する氣持、此等の氣持の間には、同一の生命によつて育まれた者のみが感じ得る血族的な親みと情愛とを明に見る事が出来る。リーグ戦に臨むのも單に十一人が試合するに非ず。先輩と部員と、サヴとレギュラーとが一の家族的團結を藏して試合をするのである。練習の土臺となつて選手を盛り立て、呉れるサヴの人々の生命が試合場で敵を壓倒する原動力となる。

今や世界の狀勢は複雑を極めてゐる。複雑になつたら一層單純な根本に戻つて肚を据えなければならぬ。複雑怪奇といふ小細工を弄するのでは大きな事は出来まい。

であらふ。

鈍根、不純なる愚感、過去に於ける數々の不満足なる所行、全て自己に對する反省は自分を淋しくする。

然し自分は天より自己に與へられたものは潔くこれを肯け容れなければならぬといふ氣組にはなり得た。

又過去の自己に對する不満も、「結局成る可くして成つたのだ、いや所詮自分としてはこれまでしかなり得なかつたのだ」と思ふ氣持に馴れてからは、徒に自分を焦躁に驅る事はなくなつた。

自分は過去の全てを謙虚な氣持で肯け容れ、現在の矮少なる自己の上に、斯くある可き自分をこつくと築きあげたいと思ふ。

そしてその結實の如何を問はず、建設の過程に於ける眞摯なる精進に自分の満足と安心とを得たいと思ふ。

○何事をやるにしても、その對象に對する深い愛がなくては其物を眞に堀りさげる事は出来ない。愛がその努力を眞摯にし、その努力が亦其の愛を深めてゆく。

見榮も打算もうちすて、その對象に溶けこむ時に如何なる試練にも、苦惱にも耐え得られ、悲しいにつけ嬉

蹴球部も殆ど同一のメンバーを持つてこゝに三年目、技術的には複雑なる戦法もこなすやうになりつゝあるが、併し此の時にこそ、我々が蹴球する根本の氣持まで掘つてみる必要が甚だ大なりと信ずる。單純なる氣持にまで戻つて、そこでどつしりと肚を据えてかゝらなければ、空調子に乗つて了ふ惧が多分にあるであらう。

部員たる者は、此の非常時になほ蹴球する事の出来る喜びを感謝せねばならぬ。蹴球部に神あらば、神の前に恥ぢざる行動を以て蹴球一路秋の大目的に向つて前進してゆく決心である。(完)

無題

本三 吉澤 貞雄

○現在自分の生活をリードしてゐる生活感情は、精神に於ても、感情に於ても、肉體に於ても、絶えず自己を成長させてゆきたいといふ希求である。此の氣持を失つたならば、私の生活は全く倦怠一色にぬりつぶされて了ふしいにつけ、心からの涙が流し得るのだ。

蹴球部生活に於ても、自分は眞の涙の味をしり得る人になりたいと思ふ。

○自分はあるもやり度いこれもやり度いといふ氣持に驅られ勝ちであつた。

このこと自體は決して悪いこととは思つてゐない。然し自分は自己の能力に對する反省を忘れて、無暗にそれらのものに手を出し乍ら、弱き意志をもつてそれらに突き込み得ず、理想と現實とのギャップに哀れな嘆きを繰返して來た。

眞の愛に徹するためには諦らめる可きものは諦らめなければならぬ。

○自分は努めるにあたつて、他人に優越したいといふ野心から出發した場合が多くはなかつたか。野心に出發した努力からは眞の成果は得られない。

貴いのは心の底から勉めたいといふ氣持なのだ。

○自分のさゝやかな生活は蹴球部生活を通してなされた。蹴球部に居るからには當然だとも言へやうが、蹴球部がよき部であるからこそである。残る可くして残つた

傳統に流れてゐる眞實を求める心、蹴球部精神は現に我々部員の間に力強く流れなくてはならない。

それは眞實なる故に永遠に残る可きものなのだ。蹴球部生活は何等準備のための生活でなくして、それ自體貴い生活だと思つてゐる。我々はこれを通して人生に處する態度を築きあげてゆかう。些かの智識の犠牲は問題にならない。人生の智識より人生に生きる態度こそ、先づ我々が修得しなければならぬからた。(以上)

思ふまゝに

本三 荒川守之助

蹴球部生活既に五ヶ年半、この秋のみが吾々に残された唯一のシーズンに過ぎぬ。今、學生時代に見る最後の部誌に筆を執るに當つて、一種の哀愁を禁じ得ぬ、何か書かうとすると諸先輩がどんな氣持で最後の部誌を飾らうとしたか、私の頭を去來する。

私にとつて部生活は學生生活の全てだつた。思春期の高商大會で神戸高商を破つた時のあの感激、淺枝さんの喜び様が目に浮ぶ。この時代は私にとつて所謂アダム・スミス時代とも云ふべきものであつた。

第二段階は蹴球部の一轉換期に相當する自覺時代とも云へる時代であつた。餘りにも楽しかつた部生活が逆境に落入つた時の苦しみの時期であつた。この時代、部員は全て信じ合ふことを失つた様に見えた。部の氣分がかくまで混亂しては詮ん方ない。部は一部三年の死守もそこゝくに二部に轉落して行つた。私は信じ切つてゐた部に、又部員に裏ざられた様な氣持だつた。

斯くて外に於ける目標を失つた私はその當然の結果として自己内部に頼らざるを得なくなつた。私は何か明るいもの、(心の灯と云つてもよいかも知れぬが)にあこがれて、安心しきつてボールを蹴らして來れる基底とも云ふべきものを探し求めて考へぬいた。比喻を用ゆれば、この時代は自由主義の崩壞から統制經濟への移り行きと云つてもよい。

私は専ら自己完成への道をたどらうとした。外から内への生活に移つて行つた。何か利己的に傾いて行つた。

迷ひ易い私に一定の方向を與へてくれた道しるべだつた。共に泣き共に喜ぶ人間の心と心の觸れ合ひを味はせてくれたのもそれだつた。私は部に對する感謝の念を以つて思ひ出づるまゝに書き綴つて見ようと思ふ。

私にとつて部生活は大體三つの段階があつた様に考へられる。第一段階を假に名付けると盲從時代と云へる。この時代に於ては私は先輩の言は全て正しいと思つた。先輩の云ふまゝに行動すれば間違ないと思つた。人間は素直になつて經驗を積むことだと結論した。この第一期こそ私にとつて最も懐しい思ひ出の時代であつた。練習終つて、所謂山手組の諸兄と一時間近く空腹を耐へて田端まで歸つて行つたが、この間に何かにつけて教へられる所も多かつたし、親しみ易かつた様である。この頃の部員間の縦のつながりは寮の出來てしまつた今日では一寸考へられぬ雰囲気であつたらう。斯様な上下の交渉が何んな形式でもよいから復活しないものかとしみじみと思ふ。それからこの時代を最も楽しくして呉れたのは試合だつた。試合はお互に負ける氣なぞしなかつたし、豫料二の春對立教戦に破れたのみで全ての試合に勝續けた。

然し自然の確立は一見個人主義的な形式を取つて發展するものである。それが全體の強き一部を成す、個我の目ざめだつたら喜んで寛容さるべきであらうと惟ふ。

吾々はこの時代に新しき部の創造に必要な地盤を築いてゐたのであつた。私にとつてこの時代最も印象的だつたのは掛さんだつた。二部に轉落した時の對明大戰に於ける掛さんは何日まで私の中の心に残つてゐる。昨年は見事復讐した。喜しかつた。然も同じ帝大のグラウンドにて。

第三段階は現在であり、所謂發展時代である。小西さん、後藤さんの提唱した新段階の以後に相當する。苦しみを経た人間、自我の目ざめを持つた人間の力強い全體が發展せんとする時代に相應する。私も部と共に何やらこの時代を背負ふ人間の一人に成つて來た様な氣がする又一つの比喻を許すなら統制經濟發展時代とも云へるこの時代に、私もその歴史の擔當者、推進力として益々必要な自己の確立に勵進せねばならぬと痛感してゐる。

以上私の部生活について色々述べて來たが、最後に私の蹴球部生活について雜感を少々附加へて終らう。

外面的生活から内面的生活に移る時、吾々は内外生活の一致に至るを理想とする。

個人主義は外面的生活の内面的生活への單なる包括を意味し、誤まれる全體主義は丁度その逆を主張する。然し眞の全體主義的生活とは、私によれば内外生活の矛盾なき一致、綜合を理想とせねばならぬと思ふ。

頭によつて御された生活と心によつて御された生活とは各々その範疇を異にする。原始人なら心のみの範疇によつて迷ふことなく生活したであらうが、餘りにも理性的になつた吾々には、吾々の行動に對する論理を必要とする。心は是を宜としても、それを肯定する論理を持たねば身體は二つに分裂してしまふ。反對に理性の許す行爲も、もしそれを可しとする心が従はねば良心の惱みを味はねばならぬであらう。

蹴球部生活も部の構成者たる吾々が心と頭とが共に許して、身體の全てを打入れて得たる生活でなければ意味がないであらう。かゝる眞の蹴球部生活を生活したいと望んでゐる。

吾々の凡ゆる生活に於てこの二者心と頭とが分離した

呼び起されるのである。之等の回想、そして又識らず／＼の中に體驗し得た大小多くの事が永久に吾々の心に宿つて強き力を與へて呉れるに違ひない。

部に入つて間もない豫科一、二年の頃はグラウンド一杯に展げられる力の躍動、眞剣な練習に強い魅力を感じ、驚異の瞳を見張つた。年は移れど、年々激しい練習が續けられて來た。蹴球部の中に生活し又生活しつゝある多數の人々の力が年毎に商大蹴球部の傳統を築き上げてゐるのである。

激しい練習に飛び込んで行く三十餘名の部員の創り出す力、眞摯な部員の努力に依つて醸し出される部の雰囲気、そして部員相互の厚い友情は、商大六年間の生活の中に吾々を育み上げて行くのである。激しい練習を突破して行く部員の胸の中には言ひ知れぬ歡喜と共に種々なる體驗が積み重ねられて行く。之等の體驗が眞に尊い體驗として生かされる時、激しい練習は全の意味に於て意義があるのである。吾々を育むこの蹴球生活は其れ故に眞剣な生活でなくてはならぬ。蹴球生活に己自身を没入する事に依て眞に吾々は育まれるのである。蹴球の中に

時が惱みなのである。私は個我の確立とはかゝる二者の統一を確保せる生命者に他ならないと信ずる。かゝる理想的個人の集まれる全體生活を心に畫くだけでも生々として氣持がよい。

私も行動する以上かゝる心にあるものと、頭にあるものと一致せる行爲のみを残したいと惟つてゐる。そこには後悔など微塵もない。その屬せる全體に自己の全てを投げ入れることが出来る。(一九四〇、六、二四)

隨 想

本三 吉 田 富 彦

五年の歲月も瞬く間に過ぎ去つて後半年餘りで學生生活を終るのかと思へば、誰しも過ぎ去つた生活を振り返つて色々と、自分の五年間を考へずには居られぬであらう。其處には自分なりに楽しかつた時又苦しかつた時の思ひ出が浮んで來る。蹴球部の中に生活して來た自分達には、殆ど全ての思ひ出が小平のグラウンドを中心として

蹴球する事によつて求むるものを追求せんとする時、己が全身に充溢せる力を感じ、蹴球を通じて新なる力が與へられるのである。所謂眞に張切つた氣分で永く居られる人は蹴球する事に於て益々新なる力を與へられ、自己の生活に新なる力で臨む事が出来るのである。一度びグラウンドに立てば充溢せる心は自ら必勝と闘志を湧き出さずには置かない。吾々にはこの氣概が自ら生じなければならぬのである。そして之は日頃の生活の上に創り出される事を忘れてはならない。

商大蹴球部が創られてから部員の團結、纏りは此の部の一つの誇りとして傳へられて來た。團體生活に於ける纏りは各員の友情に發してこそ強いのであつて、この各員の間の友情に依て吾々は育まれて行くのである。日常の一切の生活に於て友達と隔て無く話し合ふ多くの機會に恵まれる部生活に吾々の團體生活の意義があるのである。之の友情を通じて吾々は本當に尊き體驗、教へを得る事が出来るのである。團體生活に於ける完全なる和の上に、各人の自覺にいたく強き意志、創造的精神が働く時、吾々の部生活は最も望ましき姿になるのではなから

うか。

部員間の堅い團結の上に築かれた、商大蹴球部の傳統は益々強い纏りと共に年毎に増える部員一人の力に依りて愈々堅められ發展せしめられねばならぬ。

こんなことを思ふ

本三 清 水 睦

部誌。幾年か前に綴られた部誌ではあるが常に新しい姿で私の前にあらはれて来て私を惹きつける。

過ぎ去つたものの思ひ出として温く浮びあがつて来る許りではなく、現在、蹴球部に籍を置く私にとつて、部誌は常に私と共にあることによつて生々と新しい。

最も端的に、最も純粹に、黙々として精進する姿の中に、蹴球部を宿されたことこそ私達の行き方を示されたものではなからうか。

成る程、時の流れの中にあつて、自己の進む可き道は先人のそれではないかも知れない。が、誰に許された言

葉であらうか。

部に安逸を求める者が許さる可きでない様に、我儘勝手、小我にとちこもることが個性的であるなどと自惚れたなら、蹴球部らしさと云ふものは、一體どうなるのであらうか。

運動部員らしい行き方。蹴球部の一員であると云ふ自覺。それによつて結ばれるもの。私達は常に見失なはな

いで居たいものである。學生らしくない運動部員らしくない學生であつてはならぬと同じ様に、運動部員らしくない學生であつてはならぬ處に私達の行く可き道があるのだが。

學生の運動部。運動部の學生。私達は、明日の爲に、部誌の中に記された眞に運動部員らしい行き方をもつと掘りさげて見る必要があるのではなからうか。(以上)

部誌に就て

本三 石 割 知 之

愈々本科三年の秋を迎へ、最後のリーグ戦に臨まうと

して居る。五ヶ年を顧みて一番思ひ出されるのは此の部誌である。此所に始めての部誌編輯に就ての私の経験を語つて今後の参考にして戴ければ幸甚に思ふ次第です。

私が始めて部誌の編輯を任されたのが豫科三年の時である。當時は本科二年に居られた熊澤さんがやつて居られたが、突然部をやめられたので、本科生に一人も手の餘つて居る人も無く豫科三年の私に當時の主將鈴木さんから任されたのである。始めはひどく面喰つて、凡そ筆に縁の無い私に出来る筈もないので極力辭退したのであるが、考へて見れば他の人は皆プレーに専心はげまれて居て、私だけがプレーから離れて居たので引受けて見る氣になつたのです。それが恰度夏休み前でした。先づ此の部誌の編輯の第一號から三號迄をやつて居られた田島先輩を會社からわざわざお呼び立てして、部誌編輯の如何なる仕事を承はり、田島さんの部誌に對する色々の抱負を伺つて部誌といふものゝ意義を一層深くしたのである。其の時のお話で、今迄六年間蹴球をやつて居られた人も一旦社會に出られると仲々部の事が分らず、又知りたいのださうですが、さういふ先輩の方々と部との橋

渡しをすることが此の部誌の重い任務である、といふ事が深く今でも覚えて居ます。其れ丈に此れは部員の中一人でも原稿を欠かしてはならぬものだといふ事が私の當時の決心でした。

然し學校がもう終つて皆に會ふ機會が無いので原稿催促が一々葉書或は手紙で出さねばならず、鈴木さんを再三お呼び立てしては原稿募集の對策を練つたものでした。部誌の發行を十月のリーグ戦の第一戦迄に出すといふ事になつて、印刷所を府中の刑務所ときめて、早速行つて見ました。警官のピストルを腰にブラ下げて監視して居るのを横に見て餘り綺麗でない事務所に入つて見ましたが、生憎印刷部の人居らず、二度目に行つて未だ會はず、三度目にやつと會へたはよいが、夏は仕事はやらな

い。九月に來い、などと云はれてあの寂しい所に度々足をこびましたが、結局原稿が全部集つたのが九月に入つてからでした。其の間第三號の部誌を隅から隅迄見通して、卷頭言はどうする。寫眞はどれにするか、カットはどうするのか、色々田島さんに伺つて集つて来る原稿をあれこれと積み並べて見て居ました。

面白いのは「話の泉」と「個人漫評」で、「話の泉」といふのは「追込み」でない時に餘る空白を埋める短い原稿であるが、夫々方々から集つて其れ丈でも雑誌の二頁を埋める程ありました。四號にあるのは其の一部しか載つて居ず、後は皆埋れて了つたのですが、傑作ばかりの惜しいものでした。然し「話の泉」の中心は大抵きまつて居て遠くは、今は亡き荒井さん、村井さん、鈴木さん、又續いて狩森さん、現役では吉澤位のもので、他の人は時々一つ位出るか出ない位で、前述の方々によつてあとは占められて居た。近頃はそれが無いから安心して部誌が開けるといふものです。「個人漫評」も書く人がきまつてるので最近では廢止になりましたが、狩森さんの喰べる事、池尾さんの足等は何度か、れても又何時もない事はなかつたでせう。

斯くして集つて行く一方、出さない人を辛抱強く催促するのが肝要で、さうなると出した人は何時でるんだと訊かれ、又出さない人はもう締め切つたんだらうと苦しい云ひ譯を云ふし、やつとことと集めた原稿を持つて刑務所に持つて行くとほつと一安心しました。所が一ト月のやつた仕事は未だくゝ努力の足りなかつた。然しやがて七號、八號と出るには誰か又此の衝に當らねばならぬのであらうが、出来る丈心臓を強うして原稿を集めるのが一番必要である。又原稿さへ集まればあとは仕事は樂である。

此の點を強く主張するのは各部員の方々に今後とも出来る丈此の點に援助して貰ふ爲に早く原稿を提出する様にお願ひする事である。

今後の部誌の道として長瀬先輩の下に更生の道に辿られたあの四部時代からの十年史、或は商大サッカー部誕生廿年史でも作ると面白いものが出来るのではなからうか。然し今日の状態では大部分の先輩が軍務に従事せられて居て難しい事であるが、二三年経てばさう難事でもなからうと思ひます。

不悟辨

本三 高橋道太郎

待つても何の音沙汰なく、発行の日が間近になつても校正一つ送らず、再三の催促でやつと送つて来る校正も案外誤字脱字は無く、出来上つた時の嬉しさは何とも云へなかつた。皆が始めて手にした部誌を読んで居る時、私はもう原稿を集める時に三度位、又校正の時三度位それも隅々まで讀んであるので今更讀む必要もないのですが、何故か一冊を手にして授業中頁をめくつて居ました。

然し此の四號の原稿を印刷所に持つて行つた後で長瀬先輩の訃報を聞いたのでした。そこで翌年の長瀬兄特輯號を又引受けたのですが、長瀬兄一週忌を發行日としたのに仲々原稿募集が巧く行かず、殊に先輩の原稿を主としたので百頁に餘る部誌の校正を二人で一日でやつて了つた。此れは普通の印刷所なので脱字誤字が多くやつと一ト通り見たゞけで出したので五號はあの通り不出来、亂雑な編輯になつて了つた。

去年は都合により吉田君に代つて貰つてあの通り立派なものが出来上つた。小西先輩と色々御骨折の結果である。本年も高橋君の御骨折も一ト通りではあるまい。私

漱石の「行人」の中にかういふことがある。

主人公の大學教授一郎は苦しんでゐる人間である。うはべを見ると何の異常もない平靜な彼の心は、書物を讀んでも、理窟を考へても、飯を食つても、散歩をしても、二六時中何をしても其處に安住することが出来ない。何をしてもこんな事をしては居られないといふ氣持に追ひ立てられてゐる。「自分のしてゐることが、自分の目的になつてゐない程苦しい事は無い」と言ふ。

而も彼は、心の落付を得るべき境地を、知つては居るのである。即ち天地も萬有も、凡ての對象といふものが悉く無くなつて、唯自分丈が存在する境地、而もその時の自分は有とも無いとも片の付かないもの、若くは、自分とも對象とも片の付かないものである。謂はゞ絶対即相對の境地である。彼はこの境地を明かに認めてゐる。而も實際にはそこに入り得ないで焦慮り抜いてゐる。

その一郎がHといふ友人と旅行した或る日、暑い日盛りの庭に立つて、薄の根方に蟹が這つてゐるのに見惚れて、長い間凝と動かずに立つてゐる。そこでHがかう言ふ。「君は絶対々々と言つてむづかしい議論をするが、

何もさう面倒な無理をして絶対なんかに入る必要はないぢやないか。あゝいふ風に蟹に見惚れてさへ居れば少しも苦しくはあるまいがね。「先づ絶対を意識して、それからその絶対が相對に變る刹那を捕へて、そこに二つの統一を見るなんて随分骨が折れるだらう」「それより逆に行つた方が便利ぢやないか。つまり蟹に見惚れて自分を忘れるのさ。自分と對象とがびたりと合へば、君の言ふ通りになるぢやないか。」つまり絶対、物から所有される、ことが、即ち絶対、物を所有すること、すなはち絶対即相對になるのではないかと言ふのである。

二

今安心といふ言葉を使ふならば、このやうに自分の全部が、損も得も要らない、善も悪も考へないで、一の對象に所有されるといふやうなによつて、安心を得ることは、確かに一の安心の仕方である。

この場合に、自分が所有される所の對象は、それが何であらうと同じことである。薄の根方に這ふ蟹であらうと、飯を食ふことであらうと、又書物を読み理窟を考へることであらうと、又球を蹴ることであらうと。

てはならない。一見靜止的に相手に對し、而も相手のあらゆる動きに應じ得る状態に、動的に充實してゐなくてはならない。

それは蹴球に於けるバックの極意である。そしてそれは禪の極意に、更に人生の極意に通じてゐる。即ちこの場合に、蹴球、禪又人生を、修業の場と言ふのである。

「蹴球部生活の意義如何」といふやうな事がよく問題になる。そして様々な答がなされるが、私の考へる限りでは、このやうに「一の修業場を持つ」と言ふのが、最も有力な解答になるのであらうと思ふ。

三

然し更に、結果の方面から問ふのでなしに、逆に動機の方面から、我々は「何故蹴球をやるのか」と問ふならば、以上のやうな説明では不十分になつて来る。

我々は「修業の場を持たんが爲に」蹴球をやるのであらうか。確かにさういふこともある。而しそれのみではない。何故なら、蹴球が人間にとつて唯一の修業の場なのではないことは言ふまでもない。而も我々は何故他の修業の場へ入らずに蹴球へ入つたのであらうか。上に述

そこに於て體得された所の境地は、他のあらゆる場合に通用し得る所のものである。それは人生といふものへも亦通用し得る。その意味で、それらを——蟹や飯を食ふことをさう呼ぶのは少々變に聞えるかも知れないが——修業の場といふことが出来る。

「我々は蹴球部生活といふものに於て、一の修業の場を持つ」といふことが出来る。

このことをも少し説明すればかういふことである。何かいふ偉い禪僧が禪の極意を稱して、「不動智」といふたさうである。劍を把つて十人の敵に對した場合に、その中の或者に對して特別に氣を配る、即捉はれてはならない。さうすれば他の者に對して隙が出来る。十人に對して同じ注意をしてゐなくてはならない。従つて一見極めて靜止的である。而も内にはあらゆる動に對する力が、働いてゐる。動的に充實してゐる。さういふ状態をいふのださうであるが、蹴球の場合にも同じやうなことが言へる。例へばバックがフォワードに對した場合である。バックは相手の球に捉はれてはならない、又身體に捉はれてはならない、又抜かせまいといふ心に捉はれ

べた解答では、之に答へることが出来ない。

合理的に考へて行けば、どうしてもそこに突き當らざるを得ないのである。それを解釋するためにはどうしても、吾々の内に働いてゐる或る非合理的な動機つまり「蹴球が好きだから」といふことによるより外に無いと思ふ。

極く分り切つたやうな解答であるが、私がこのことを明確に意識するやうになつたのは、それ程簡單にはなかつたのである。嘗て私が、一時部を退くやうになつたのも、一つにはこのことが明つきり分らなかつたからである。私は當時合理的な面だけを考へてゐた。そして私の前には兎に角多くの場が見えてゐた。その中の唯一つに没頭する理由が納得出来なかつたのである。好悪といふやうな、謂はゞ非合理的なものを考への中に入れることが出来なかつたのである。所がそれが大切なことで實際行爲を支配する重要な因子なのである。合理的なものと、同時に非合理的なものとが共に働いてゐるのが現實である。

蹴球部生活の意義如何といふやうな問題を考へずに、

只ひたすら、謂はゞ「馬鹿になつて」球を蹴つてゐた時代、私はそこで無自覺な状態に於ては、あるが兎に角、蹴球部生活といふ世界の現實とびたりと合つてゐたのである。同時に私自身の現實と合つてゐたのである。それが合理的な方面が強調されて非合理的なものが忘れられた時に、私は現實と離れて了つた。そこで私は、淋しいとか、何か抜けてゐるといつたやうな感じを味はねばならなかつたのである。そしてその感じが上述のやうな解答を見出す契機となつたのである。

「蹴球が好きだ」といふ氣持、それが吾々の蹴球部生活に於けるあらゆることの根柢になつてゐるのである。吾々がそも／＼蹴球をしてゐるといふのもその爲である。練習などの辛さに堪える場合もさうである。部に對して何か意見を述べる場合でもさうでなくてはならぬ。例へば、忠告する場合にも又いくら意見が衝突することがあつても、友情といふものが根底に於て交友を支へてゐるやうに、それはさうでなくてはならない。又もつと消極的に、私のやうにちよつと變な立場になつてゐて皆に迷惑をかけるに違ひないとは思ひながら、やはり

——それが良いものであるにせよ、悪いものであるにせよ——を、全體として所謂部の團氣として、自分の身につけるやうになるのである。

そこで直ちに考へられるやうに部員が同化さるべき團氣を、良いものにして行くといふことが吾々の責任となつて來るわけである。

五

前に歸つて、更にも一つの問題を考へて見る。

一の對象に所有されるといふことは確かに安心の一の仕方である。而しながら「唯一つの對象に自分の全部が所有しつくされぬ」といふ場合はどうであらうか。例へば、蹴球といふ一の對象に所有されてゐる者が、他の對象例へば學問といふやうなものに所有されてゐる者に對した場合には、何か壓されるやうな不安を感ずるといふやうな場合はどうであらうか。

それは「未だ所有され方が足りない」故であると言へばそれまでである。

而し又かういふことも考へられないものだらうか。例へば、芭蕉とゲーテを比較した場合に、芭蕉は俳句とい

離れられないでゐるやうな場合にもさうなのである。

私はかう考へて來た時に、長瀬さんの言はれたといふ「蹴球と戀愛しろ」といふ言葉をびんと感じたのである。

四

更に、それでは「蹴球と戀愛することの意義」は如何であらうか。

この問は見方によつては、必要なもしくは無意味な問である。何故なら、戀愛するとは、絶対に所有されてゐること、即ち安心してゐることである。安心はそれ自らが窮極の目的——少くとも個人を個々に考へた場合に——であるからである。そこに於て、安心した、もしくは純粹にされた生活を持つことが出来るといふこと、それ自らが意義あること、考へられるからである。

而し、更にその効果の方から見れば、かういふことが言へる。戀愛のもたらす大きな効果は「對象との同化」といふことである。その戀が強い程、もしくは純粹な程、同化する程度も大きい。吾々は蹴球部と戀愛することによつて、蹴球部が持つてゐるさまざま／＼なことがら

ふ唯一つの對象に所有されてその内で自分の全部を働かした、一方ゲーテは、文學・哲學・自然科學・政治等々の多くの對象に所有されてそこで自分を働かした。そのやうに、人間は夫々の性格の相異によつて對象の何か多とかの相異が出て來るのではないかといふ事である。

前者の場合に不安であるといふことは、確かに所有のされ方が足りない故に起るものであらうが、こゝでは後者の場合について少し考へて見たい。

さういふ性格の人間でも、例へば「行人」の一郎が蟹に見惚れてゐたやうに、一の對象に一時的に十分に所有されるといふことはあり得る。もし私がそのやうな性格であるとして球を蹴つてゐる間はそれに十分に所有されてゐて、而も平生屢々不安を感ずるとする。而もその場合に私が球を蹴つてその間の一時的な安心を求めるといふことは如何いふことであらうか。

それは丁度、酒を飲んだ時にすべてのことを忘れる場合と同じやうに、つまり逃避といふことになるのではないだらうか。それは兎に角一時的な安心かも知れないが

「眞の安心」ではない。

それでは「眞の安心」はどこに求められるのであらうか。その性格に従つて向ふ多くの対象をすべて征服した後であらうか。さうとすれば恐らく一生安心は得られまい。而しさうではなくて、安心の問題は対象の側にあるのではなくて、自分の側のどこにあるものなのではないだらうか。それは「自分が自分自身を所有した」といふやうな状態にあるのではないだらうか。

私はさう考へてゐる。而し今は安心してゐない。不安である。そして今の私は、不安であることよりも「眞の安心」に至らない中に「偽の安心」に満足して了ふやうになることを恐れてゐる。

(十五、七、五)

隨感

本二 鈴木英二

○春のシーズン、——今年は何れ年になく練習を休んだ日が多かつた。心が緩んでゐた故であらうか。

をよく耳にする。それ丈、僕達の部は何か特徴をもつ存在者として局外者の目に映することあるにちがひない。そこでは、すべてのことが蹴球部の個性をもつてゐるのである。蹴球部といふ色彩をもつのである。こんな意味で表題を斯くつけたのであつて、他の世界に於ける。如何なるそれも問題にしてゐるのではない。僕が、今の生活を律する所の、僕が、此頃考へてゐる所の個人主義を、或ひはその名が適當でないかも知れないが、筆に言はせて行く。この事を考へる動機を興へてくれたものは毎日の練習日誌である。この四月からは、去年よりは、とりわけよく讀んだ。書かれてあることは、一應はよく解る氣がした。といふことは、表面丈は僕にでも容易に解ることが出来る、といふことである。毎日の練習のこと、部の空氣をどう感じてゐるかといふこと、蹴球部といふものゝ意義づけとか、近頃こんなことを考へてゐるか、實に他には見られぬ位充實した日誌が、そこには記されてゐるのである。併し、その書かれてゐることを一歩つき進んで考へて見ると、解らぬことが、残念にも、殆んどであることを感じる。こゝで、人間一人々々とい

兎に角春には「秋に頑張れば良いんだ」と云ふ様な聲が自分の何處かで叫んでゐたことは確かであつた。その爲にか張のない練習をなしシーズンを顧みても何一つ自分のものとなつたものはなかつた。秋には……

○私はいつも「これからやらう」とか新しく出發だと云つて來た。が又今茲でも新發足をしやうと考へてゐる。人は過去を顧み、反省して見て其處に何か自分に足らざるもの、其の他種々のことを教へられる。私は過去に自ら踏んで來た途のさういふ點から又今年新しく出發することを誓つてゐる。

蹴球部的個人主義

本二 折下 章

どうも變な題名をつけて了つた。僕の先生が、僕達を見てよく、『サッカー部的な顔の黒さ』と言ふ。特別に黒いのである。單にこの一事にとゞまらぬ。すべてのことに於て、『サッカー部的』といふ言葉がつけられるの

ふことを強く考へさせられたのである。勿論、この様なことは、日誌に於て始めてのことではないが、そこでは、蹴球部の色彩を帯びたものとしてこの事を感じ、それ故に考へさせられたのである。練習のこと、練習の空氣、それ等について書かれたことは表面的である故に、勿論、部にあるもの全部が解らねばならぬことである。

こゝに云ふ、前にも言つたが、又このあとにも出てくるであらうが、この「表面」といふことは「皮相」といふ意味に於けるそれではないことは、こゝに注意する迄もない。言ひ換へれば、部員全部が、息吹きするところの同じ生活の場を指してゐるのである。が、蹴球部の生活といふものをこの場のみには、僕は考へたくない。もつと廣いといふか、多面的といふか、次元的といふか、はつきりとまだ概念づけることが出来ないのであるが、これ等のものが有機的に體系づけられた生活であると、豫想をしてゐるのである。この豫想の上に立つて、グラウンドといふ場に「表面的」といふ語を用ひ、更に個人といふものを強く感ずるのである。

このグラウンドに於ける直観の世界は一つの場である。一般的な、部員全部の共通な場である。それ故に、ここではすべてのことが解らなければならぬ筈である。同じ體驗だから。解らぬ者は蹴球部員ではない。が、一歩進んで、その直観の世界へ来る部員銘々の途、又そこから歩んで行く部員銘々の途（一人の人の、この往きと復りの途の究極は同じ處、即ち、眞であると考へるが）へ入つて行かうとする前に言つた、所謂、解らないものとなつてしまふのである。前に掲げた、練習日誌の内容のうち、あと二つの部分が解らないといふことはこの意味なのである。その言葉が言はれる、その人独自の雰囲気、氣に浸れないのである。（主観の相異といふ言葉で、簡単に扱へば扱へないこともないであらうが、それ丈では飽足らない。）こゝに特異な共通なる、直観の場をもつ、これを強いて名づければ、蹴球部的な個人主義といふものが考へられるのではないかと考へて、この個人主義は更に發展して彌々蹴球部個有なものとなつて行く。

右に述べた共通なる場へ、降りて来る源、そこ（共通なる源）から昇つて行く頂上、この共通なる場と、個別が、私はその一つに自分勝手な意味を持たせ、一種特別な意味深長な價值をつけて、心ひそかに喜んでゐるのであつた。私の生活は充實してゐた。私は幸福だつた。……』といふ言葉を見出してひどく共感したのである。僕は部員相互の關係がこゝまで進んで行つたら、理想的な部生活といふものが現出してくるのではないかと考へる。或は、この關係の不可能なる二人といふものが考へられるかも知れぬが、それについては未だ十分に考へが及ばないから、こゝでは書かない。

ドストイエフスキーは『人間といふ奴は時々自分の感情の深みに迷ひ込んで、途徹もない馬鹿を仕出來す事があるものである』といふ様なことを言つてゐた。尊敬する先輩達が残して行つた、新段階に於ける建設の困難をつつく感じ、そして、それに關聯させて以上の様なことを考へてみたが。どうも。

洗濯。

今日、シャツ、パンツ、猿股等の洗濯をする。今迄、休みに家へ持つて歸ると、何時も家のものに洗つて貰つてゐたが、今度、始めてする。石鹼の泡一つに此の

的なる源乃至頂上との間の、従つて當然個別的な結びつきの綱、これが解つてくれる友との生活も亦、蹴球部の生活の内に含まれるものではないか。ちようど二つの氣球の綱と綱とを、更に横にもう一本（或は二本、三本、……）の綱で聯絡をつけた形。多くの面乃至段階に於て多くの相互に理解出來なかつた、部員銘々の個別的な生活、前に殆んど解らないとまで書いた各人々々の眞の生活と生活の交互作用が生れてくる迄に發展して行かねばならぬ。こんな處に僕は、部に於て生きるといふことこの理想を見出すのである。

話し合ふこと。一寸考へるとこれ程容易に爲されることはない様であるが、殊に蹴球部に於てさう見えるのであるが現實を眺めてみると、何んとこの事が充分に行はれてゐないことだらう。このことに依つてのみ、單に表面的な場、一番低次の場のみを共有することが出来るばかりでなく、更に内面的な、より高次の場が共有され得るのではないか。相互に理解出來る範圍の擴張が成し遂げられるのではないか。この春讀んだ本に、『……それは大抵ありふれた、たいした意味のない言葉ではあつた

春合宿以來の種々のことが腦裡をかすめる。七彩のかけを眺めながら、あゝいふこともあつた、かういふことで苦しみましたと。そして思ひは何時か米山兄に走り、更に、夏合宿から、秋シーズンに及ぶ。

シーズンオフになつて、ユニフォームを洗濯することはなかなかよいものだ。尤も、こんなことで、かういふ思ひに浸れない人には別だが。

夏日斷片

本二 松岡義彦

○今夜も又星が……。折角降つた待望の慈雨も、もう一滴も残つてはゐない。もう七月、眞夏だ。今日グラウンドで見た、僅かの間にめつきり濃くなつた緑の彼方に、むくく〜と眼れ上つて来るのは正しく夏の雲だ。

そして今、何時になく靜かな小室で机の前にポツネンと坐つて、星の暗い空を眺めてゐると、煩しい日常事や、強い陽の光に怯えてゐたおろかな腦髓も僅かに考へ

る事が出来る。

○近頃、自己を偽らねばならない生活を持つてゐる人は幸福な筈がないと思ふ。所謂「功成り、名遂げて」だかどうだか知らないが、とにかく何十年か後の「人生の黄昏」のことを考へてみると自分の本當の生活を枉げて型にはまつて行く中に生甲斐なんて感ずる事は出来さうもない。脱線も結構、放蕩も結構、自分の生活を常に意識して見失はず自信を以てやれば何事も結構だ。いや、そんな事はいかんといふ奴があればそれもよし。結局、各自は各自の途に行くより仕様がな。嘲笑つたり、嘲笑はれたり、それはその後のどうでも良い事だ。只、意識せる生活も持たない馬鹿や氣狂の恩恵に浴さう等とは決して思はない。

○ところで、「蹴球部」の名前は何と胸にピンと響く事だらう。豫科の頃も、本科になつてからも、部生活の日々々が、脳裏に残つてゐるその時々断片が若さと力の象徴であり、亦追憶の泉である。「勝敗」は時の波の中に忘れられて行く事だ。あんなに後味の悪かつた豫科三年の時の事も、今では遙か彼方、遠い過去の宿場に懐

る。「……何故ならば、人間は人間を批判し得ないうちには、彼を愛し且つうやまふものであるし、憧憬と云ふものは不足した認識の所産だからである。」之は如何にもマンらしい辛辣な直述であり、全く正しい言葉だと思ふ。だが事態は此處で終りになるのだらうか。愛情とか尊敬とか憧憬とかは皆認識不足の所産なのだらうか。若し此で「終りになる」のならば永續せる愛情、尊敬等は只認識を昏ます事によつてのみ保障される事になつてしまふ。決して此處で「おしまひ」ではない。或ひは「おしまひ」にす可きではない。

人間として可能的な總ての批判の後にそれによつて却て愛情尊敬が深められ、充分な認識によつて以前のと質の異なるものにせよ、更に確たる憧憬を抱く事も出来る筈である。ニーチェにも『君は友の前に赤裸々であらうと思ふか。……友は蓋し、そのために君を悪魔に行けと願はう。』と云ふのがある。が然し、ケラーは何かで誰かにはつきり言はせてゐる。『……だつて、ありのままの人間を愛する事が出来なかつたら一體何處に生甲斐があるだらうか。』以上、関係のある様な無い様な断片を出

しい煙をあげてゐるではないか。それから又、去年の秋の久し振りの浦高の勝戦も勝利そのものゝ直接感はもう味へなくなつてゐるが、あの薄く夕焼した掃いた様な雲や、向ふの森の木立の間ににじみ出てゐた銀ねず色の霞や、吉祥寺の祝勝會や……。

大きな一かたまりの熱情の中に思ひ切り自己を溶かし込んで、騒いで、どなつて、わめいて、そして洗ひ清められて出て来るすがくしさ。多数の人格の集合が齎す見解の相異や、運命の相異等は此の大きな流の中に溶合つてしまふ。最近、部員の親和がどうかうのと云はれるが、各自が各自の蹴球を通じて營む生活の奥に認め合ふ眞摯なる「蹴球部員の姿」に於ては互に一致し、理解し合へる筈である。この後はあまり無理をす可きではないと思ふ。今のところ、自らを無理に廣くし度いと考へない。而し、決して「魂と魂のぶつかり合ひ」とか「魂の交流」等とか云はれるものを、一つの理想であるとし、或は云はゞ極限概念として手放さうと云ふのではない。我々が生涯の友であらねばならぬのは勿論である。

○トオマス・マンの何かの中で一寸眼についた句がある。まかせに並べてみた。明朝、今夜の酒氣もすつかり無くなつて、白日の下に見るみにくさは今から豫想されるが。

随 想

本二片 山 光 夫

凝視せよ。現代の世相を。

かゝる現實に直面して苟もスポーツにたづさはる我々青年學徒が無感覺に生きられるか。生存競争が激しくなるにつれて、是に堪へうる心身の鍛練を積むスポーツは吾人の生活から離れることは出来なくなつたのだ。

「ファイト」を盾とし「ねばり」を劍として奮ひ立たう。

研鑽!! 自己の職務に對する汗とグラウンドに流す汗とは決して無意味ではない。

理想無き者は停滯逡巡する。

おゝ時は今ぞ！ 猪突猛進は避くべきも徒らにマンネリズムに陥ることなく（強く、明るく、正しき前途）に向つて勇往邁進しよう。

打倒浦高。一部優勝への行進曲は高らかにグラウンドの隅々迄も鳴り響いてゐる。

○ 我ボールを蹴ること既に四年。

現在迄自己の歩み來つた途を考へる時、唯悔悟の念あるのみ。

誰かの云つた「蹴球部の真髓は一朝一夕に解し得られるものではない。」といふ言葉が、この春の合宿に於いてやつとわかつた様な気がする。

今や蹴球部生活の喜びを全身に感ずると共に、永遠に蹴球部と戀をする。新しくスタートを切つた自分の現在の氣持はこれだ。

いづこを見廻しても、商大蹴球部程の血の出るやうな傳統と歴史を誇る部はあるまい。その「纏り」の力、融和の力を以て天下に君臨する我蹴球部。其の一員として

く輝いてゐる。もうへとくだ。と又しても腹の底から湧き起る力。歴史だ！。傳統だ！。何くそ頑張れ。

熱と血が全身を馳せ廻る。

「方 言」

本一 山 本 孝 次

昔々、と云つても徳川時代の事である、播州路の内海に面した白砂青松の風光明媚な所に、錦江城と云ふ一寸したお城があつた。

そこのお大名は、松平様と云つて親藩ではあつたが、石高は僅か三萬石許りであつた。その第一御家老に織田と云ふ人があつた。勿論お家大切に、忠勤を勵んでゐたに違ひない。そしてこの家老には一人の息子があつて、名前を保と呼んでゐた。

さて、問題はこの人物にある。この一人息子の言行が、尋常人並では無かつたのである。何の因果が手取り

心から身を以つて活躍出来るやうになつた現在の自分の喜びは、希望は、覺悟は我が胸に漲り溢れてゐる。

雨の日も、風の日も何等平日と異るところなく續けるあの激しい練習。自分はへばつて來る度に思ふ。「先輩諸兄が血と汗と涙で以て築き上げた尊い歴史を守り續けるものは誰か。」と。歴史が偉大であればある程、それを傷けまいとする者は努力を要するのだ。更に此の歴史を一層輝かせる爲には如何なる困難をも耐え忍ばねばならぬ。

精進！ 自分には今迄全く無かつたこんな文字が頭に浮ぶ。さうしてこの意味がしみじみと感じられる。それだけ大いに努力しなければならぬ。

健康のシンボルのやうな感じのするボールに向ふとき、何とも云へぬ快感に打たれる。腹の底から名狀し難きものがむくくと頭を持ち上げてくる。我等の足はそれに依つて疾風迅雷の如き活動を起す。一走一蹴總てが我等若き青年の熱と意氣とのほとばしりだ。

汗と埃にまみれる。身體は疲れ、足が重くなる。吐く息吸息が速くなる。我慢して續ける。ゴールポストが白早く云へば、馬鹿なのであつた。

家來共或は町人達は、この馬鹿息子を呼ぶに、名を音で讀んで濁りをつけ、「織田保さん。」と云つてゐた。そしてこの渾名が、世間一般の所謂馬鹿共に、當嵌められる様になつて、この語が「馬鹿」に對する方言として、成立する事になつたのである。

然し、時代が進むに従つて段々と省略されて、遂には中の二字のみが残る事となつた。

話は一先づこれで終る。バカが馬と鹿とであるが如く、この語を冠した魚が居る相である。

無 題

本一 藤 塚 亮 策

浦高戦に勝つんだ。

神経が針の先で躍つてゐるやうな昨今、もうこれ以上

何も書けません。

何をくよく川端柳

やれるとこまでやるまでよ

(六月十一日)

(追記) 部誌の原稿として餘りに短か過ぎる故書き直せとの事ではありますが、浦高戦に引分けて了ひました今日猶更何も書けません。お許し下さい。

光輝ある歴史を有する浦高定期戦、先輩諸兄の血と涙を以て彩られた、浦高定期戦を演じました事は私には將に萬死に償うるのでありますが、此處に春以來歩み來つた道を沈思し、之を止揚しますれば此の苦杯こそ創造の一步を進め得べき契機と爲り得ると思ふのであります。

次に昨年度運動部制度改革問題杯と云ふ情無い問題を惹き起しました責任者として豫科の諸君の参考に迄一言致します。

滔々たる大瀛の一朝にして狂亂怒濤したるが如き今日の社會の相に直面して、年來底流にあつて叫ばれた豫科沈滞の聲が一舉に表面化して文化部・運動部制度改革問題となつたものであると考へられますが、少くとも我々

一日蹴球を想ひ感有り

本一 山田 久寧

永い暑中休暇である。水銀柱は連日三十度を突破する風は有るには有るが、モンスーン地帯特有の濕氣と暑氣とを含んで家の中の最も涼しい所に居てさへポタ／＼と汗が流れる。「滿洲中北支で御活躍の先輩諸兄は東亞新秩序の偉大なる完遂に尊き流汗淋漓たるものがあらう内地に居て、切迫した生活乍ら安樂に暮せる身の贅澤を云へた限りではあるまい」とも存せられて原稿を志せど、文才の拙き身には一向に流麗玉の如き文章は出て來ない。二階堂兄の球想陰影を讀むにつけ、自分の草すべき原稿の二層の見劣が想はれて尙更書けない。書けないまゝに放置してゐたら催促を受けた、終に意を決して拙文を物す。

○ 「蹴球部の本質は如何」凡そ球を蹴る者の本質を匪さすには置かぬ眞摯なる問であらう。併し常に妥協して本

の蹴球部に就いては彼等の認識は誤つてゐたのであります。又、彼等の豫科を思ふの熱情は大いに尊敬すべきであります。豫科を更生せしめんとする彼等の考へは新しき時代をリードしつゝある思想の假面を被つてこそゐるけれど、現状を打開せんとするにも拘らず現實に對する認識を缺き、従つて其の内容たるや實に空疎にして把み所が無いのであります。該問題の所産である今回の校内大會が如何なる結果に終つたかは雄辯に之を物語つてゐると思ひます。私は各部が飽く迄其の自主性に立脚して各部の職能を完全に遂行する事こそ豫科全體の向上發展を爲し得る道であると思ふのです。

殆ど我々を窒息せしめんとする此の複雑怪奇なる世相に直面して、我々は人類の一員として、日本帝國臣民として、一橋人として我々の明確なる態度が切實に要求されて居りますが、私にはあらゆる變貌を呈する歴史を貫き毅然として永遠に生成發展すべき商大蹴球部生活を眞剣に營むことに依つて日毎に形成されるものと思はれます。出來ないと言ふのは爲さない私であつて、それこそ言語同斷なる部員であらうと思ひます。

質解明の荆棘の道に徹し切らんとせず、安住の地を不徹底に求めんとする卑怯な心の絶ざる涌出を如何せん、此處に危惧がある。自己の妥協の故に自らを害ひ部を損する事のあるやと。でも「部生活の本質は飽くまで一つの思想に實體性を賦與する事に在る」ならば不徹底も完成への道程の心的必然として許して頂く事はなるまいか。一足飛に實體性賦與を實現し得る俊秀ならばよい。彼にあつては、妥協も無からう、不徹底も痴呆の癡言に過ぎまい。併し原稿一つに悩むやうな至らぬ痴者には妥協も不徹底も強大な迫力を以て逼つて來る。

理想として吾等が高く掲ぐる燈火は臆て實現さるべきものでなくてはならぬ。少くとも到達すべく努力されねばならぬ。元來「べし」は推量を現はす語である、然し「らし」「らむ」が疑惑的推量を現はすに對して「べし」は推理的事實を胸中に描寫するのである。主觀的に動くべからずと推定された根柢は實現され得、到達される可能性のあるを意味する。吾等爲すべきが故に吾等は爲し能ふのである。吾等は爲さねばならぬ。部のそれに伴つて部生活の本質の表示を。

○
文樂と蹴球部の行き方には関係がある。文樂は丁度何處かの温泉土産にある首と両手に夫々三本の指を込めて仕草面白く誦らす人形を大きくしたものを、二人なり三人で夫々、顔を手を足を、受持つて一つの人形として演ずるのである。人形使ひは左手に首を持ち、右手に人形の右手を持つ。従つて人形の左手、更に人形の足は、第二、第三の人に委す。文樂人形は、使ひ手の働きの具象化であるが、その爲には此の三人の働きの統一を具象化するのではなくてはならぬ。三人が實際に一人の人として動かなければ、人形は生きて來ぬ。三人の間の氣合の合致が何よりも重大な契機になる。私は最近右の様な事を知つた。此處まで書けば、文樂と蹴球との關係なんて一體存在するのかと奇異の感を懷かれたかも知れぬ諸兄はその賢明さの故に私の云はんとした處を既に感知せられたであらう。

餘りにも言ひ古されたが故に一層の眞理性を有つ、かの「部員が一體となつて敵に當る」と云ふのは、明々白々に、文樂の人形と蹴球との關係を物語つてゐるもののみ。

兎に角此處迄書き續けた、筆の運びは拙く、書ける跡は、砂上の樓閣に過ぎず、たゞ至らざるサブの身を嘆くのみ。

無題

本一 居川達一

本科生になつて見ますと、今迄とは違つた別の新しい面が展開されて來た様な氣がしまして、今の私には何も書くことが許されません。

只美しい「ダイジョン」を胸の奥に秘めて、現在の儘の姿で進んで行き度いと思ふ許りです。

思ひ出づるまゝに

本一 淵上 明

如何に外見は美しく見えようとも眞實の伴はぬものは

思はれる、吾等がサブ、レギュラー四十名の部員が、一致團結して試合に臨む、其處には滅死奉公の氣慨があらう。各員は一個たる事を意識しては居まい。團體のみがチームのみが吾等の關心の集點を結ぶ。「自分はチーム中の一分肢である、唯だチームに價値を置くが故に自己を忘却の彼岸へと押しやる」といふ、有り來りの全體主義論では私は満足出來ぬ。シュパンの理論から團體を抜き去り、チームに移したに過ぎぬ。

○
左手の役をするべきウイングが己の職責を果さず、足を務めるサブが、試合に出場せざるの故に必死の闘を爲さないならば吾等のチームは一個の人形として完璧の演技を示さぬのである。チームの運動を構成する四十名は飽迄も四十名であつて一人ではない。ウイングの苦心はウイングの苦心であつて、サブの苦心ではない。吾等は自分の立場で、その精根を盡さねばならぬ。ウイングが最も好く自己であり得た時に最も良くチームに融合し得る。自己の運命をその瞬間に懸ける程、全身の緊張を見る時初めてチームとの息が合ふのである。

醜い。如何に言葉は美しくとも人格から滲み出たのでなければ動かされない。我々を動かすのは眞實である。此の眞實の形象が美であると思ふ。

此の現實の中に於て種々の性格の人がある。例へて見れば金銀銅鐵等々になる。我々はその鑽石にも當るもので我々は之から精鍊されて行くのである。我々が純金純銀純銅純鐵等になつた時人間の完成があると思ふ。蹴球部はかゝる人達の生活の場なのではあるまいか。我々は各異つた性格を持つて居ても夫々に意味を持ち調和して居るのだ。我々の底には何物かが一貫して居る筈だ。

思ふに眞實とは純粹なる状態であらう。こんな事に怒るのはつまらぬ事だと知り乍ら感情に動かされてしまふ時味氣ない氣持がする。かゝる心の相剋を止揚した純に喜び悲しみ怒る事の出来る人は幸福である。

WMWと延長戦をやつたといふ事に何か安心めいたものを感じるのには最も危険である。我々は毎日の練習に己のベストを盡す中に秋のリーグ戦に優勝する決意を持たねばならぬ。

長瀬さんが「蹴球部は意氣と熱のるつぽである。而し

て亦愛に満ちた境地である。」と云はれたその言葉に大に考へねばならぬと思ふ。

隨處・隨想

本一 水島 行

練習の無い雨の日。

喫茶店のソファに凭れて、硝子越しに、ぼんやり雨を眺める。暖かい紅茶の香とワルツ。久し振りにのんびりとした気持で外行く人を見送つてゐた。レインコートに身を固めて胸爽と洋傘をさして行く學生。紺の合羽に、すばめた蛇の目、ハネを氣にして歩いてゐる高足駄、慌たゞしくピチャ／＼泥を飛ばして走り過ぎる魚屋の自轉車。緑色の透通つたレインコートに赤のパラソル。

心の中で色々批評して見る。硝子戸一つが動の世界と靜の世界とを隔てゝゐる。私は飽迄、傍觀者の立場である。世の中に存在してゐる批評家である。

對象の眞理性、美しさ、其處に人間の進むべき道がある。

映畫を見乍ら。

中野で「背信」を見る。映畫の良否は別問題として、ダリユーの口を借りて出た原作者の氣持が、妙に心に残つた。

「彼女が夫人を欺いたのは、（行き所無き女が、或る夫人の子供なくせし悲に乘じ、死せる子の友と稱し、夫人の愛を受く。）彼女自身が悪いのではありません。環境が悪いのです。いゝえ、社會全體が悪いのです。」

善を求めつゝも、社會の不人情の爲、惡に陥り行く人々と比して、自分は幸福であると思ふ。學生は幸せである。

斯く思ふ事より、我等の使命が見出される。

夜半下宿の六疊で。

月光木の間に洩るゝ夜半、私は寂然として古人を友とする。

漱石は「草枕」に於て、彼の愛する夢を描いた。然し、其處には、現實の醜さを脱し切れぬ矛盾に對する惱

不圖蹴球部の事が頭に浮び、其處を低廻し始める。「蹴球の善惡を論ずる者、未だ蹴球人に非ず。」とゞのつまり、こんな考へが頭の中で一つの固りをなした。私はとても蹴球の事に就いて云ふべき言葉を持たぬ。言へば、蹴球を讀へる歌にしか過ぎぬ。良く言へば詩である。そこに詩人と批評家との差がある。所謂、運動部と文化部との差異も之に含まれる。

埃立つグラウンドに於て。

今日も自暴に晴上つた風の強い日。もく／＼した雲と、日さしは、最早夏の合宿を思ひ起させる。汗が目に入る。埃は渦を爲して、きり／＼と舞ひ上る。忽ちにして泥人形が出来た。ボールを追ふ恰好、蹴る姿。意氣と熱。嗚呼。偉大なる哉。蹴球の姿よ。

リアリストも、ロマンチストも、亦、チレツタントも、ベシミストも、全てが詩人となりて、眞を、美を、追求す。恰も靈峰富士を六根精淨と登るが如く。

享樂の楽しみ、娛樂の喜び。そは一時的なるものである。直に否定出来るものである。自己の蹴球部に居り、蹴球をしてゐる喜びと比較して如何ん。

があつた。「門」に於て、門の下に佇み、日暮を待つ宗助を借りて、自己の矛盾せる體験を現はした。然し、病ひ以後、「則天去私」なる人生觀が樹てられた。

蘆花は美を通して眞を望見し、超越し切れぬと云ひつゝも、その實、超越してゐた。

「吾人、須く現代を超越すべし。」高山樗牛は云ふ。

無題

本一 村木杉太郎

今春盲腸炎に倒れた私は本一の春と云ふ最も重要な時期であつただけに、肉體的にも精神的にも非常な衝擊を受けた。病中病後に涉つて疑懼と不安に追れた私は今は何も書き度くない様な氣持である、無理に感想の様なものを書くとする、何か誤解を受ける様な不安がする。

兎に角何もかも一新する様なつもりで夏の合宿をやり度いと思つてゐる、春のやうな空元氣でなく、ほんとうの元氣で、全く豫科一に戻つたつもりで秋のシーズンを

始めたいと思つてゐる。

優曇華の獨言

本一 宮澤 力

星あれど光なき世に
とぼくくと永劫の光を求めて
旅人は歩み行く。

——それは長い旅だつたが
幾歳の流離に、若き身の
散りにし花びらは

あはれ、地上にください
もろくののもの

千億萬里の彼方に去る

来る日も

来る時も、——暗黒と焦慮

より取出して緝く此の小冊の一言一句から泌々感せられる。それは誠あり眞あり偽らぬ有りのままの世界である。六年間の長きに亙り蹴球部生活を送つた人の言にも、一年間の短き蹴球部生活の人の言にも、その奥底を流れる精神は同一である。併しながらその生活が長きに亙れば亙る程、我々は自らその表言の内に尊き心からなる蜜と卵とを味ふ事が出来る。血と汗と肉がやがて蜜となり卵となる時は、我々は有りの儘の世界の中で、更に生れんとする若き躍動へのスタートを切るのである。我々は可憐なる不憫なる情を部誌より吸収するのではなく、その自からなる發生により、より多く部誌に注ぎ入れなければならぬ。それには長き忍耐が要るのだ。永遠に蜜と卵が續く爲には強き意志が要るのである。



あゝされど、その時
ペエソスの淵邊に、ふと見れば
一もとの草の芽の萌えんとはする、
一しすくの露の流れ出でんとはする

見よ、可憐なるもの永遠なる調べ
限りあるもの限りなきものの姿を

何時かしら

旅人は白金の光の中に濡れてゐた。

——拙きノートより——

X X X

ふみにじられた路傍の一輪の花にも可憐を覚え、炎熱の下にたゆまず働く一匹の蟻にも不憫を感じるやうな人間になり度いものである。假象の世界から脱け出でて、有りの儘の世界への道程には必ずや、此の可憐さ此の不憫さの純粹なる心がなければならぬ。

我々の部誌の生命とでもいふものは、一輪の花であり一匹の蟻である。吸めど盡きせぬ味ひは何時かな机の陽



先輩寄稿及通信

通信

昭六 豊田達治

度々部報を有難う。

二月以來引續いて肅正戦に出動、席暖まらずと云ふ次第。近頃やつと原駐地でのんびりしてる。

諸兄の奮闘振りは新聞その他でも拾ひ出して承知してる、秋のリーグに一つ頑張つて下さい。

此處も月中は百三〇度を越すが、朝夕は爽涼な風が訪れて大いに助かつてる。お手の物のラヂオで、歐洲や日本の情勢を知ることが唯一の慰めであり勵みでもある。

先輩諸氏にも御無沙汰してゐる、どうぞ宜しく。

通信

昭十 二階堂謹司

今江南は深緑青葉の好時節であります、鶉も飛び、雉子も鳴く、野兎叢に跳べば鶯亦綠蔭に啼く、凡百の小鳥巢を營みて樂しげに轉るを聞けば、心自ら休む在り。一に勵み、二に休みつつ長途の旅を歩みに歩む、此の感懷！されど幸にして元氣あり、意氣亦軒昂、然し顧るに随分長い間我蹴球部には御無沙汰して仕舞ひました。其の間不斷の精進を續け伸びつゝある、我蹴球部は幾多の健闘を以て、歴史を飾り如何に多くの優秀なる人材を此の非常時日本に寄與した事か、或は部誌を通じ、又屢々なる部報に依り、此等の事實を、その都度識つた時、全幅の祝福を此の蹴球部に捧げた譯であります。と同時に或る重責を緊々と我が身に感じた次第であります。

學校、即ち、蹴球部を巢立ち社會生活を爲す事八ヶ月一ヶ年間の現役生活に鍛へられ、更に再び社會にある事八ヶ月、一ヶ月の見習士官を了へて直に今事變に際會して、召集、即ち、昭和十三年秋の出征以來今日迄約二ヶ年有半の出戦生活、社會生活は殆ど爲さざる識らざるに等しく唯識る、又爲したるは三年九ヶ月の軍隊生活のみ、然しなから出征以來今日迄、概ね、頑健に、與へられたる仕事に充實した成果を濟し得られたる處、先づ以て可なりと申すべく戦時俗態なる觀念に偷安を貪る事なく、次期作戦を考慮しての若干の私生活に於ける努力、その邊に長期抗戦に備へ得る潤ひも存する次第、漸く最近戦時勤務に若干の餘裕さへ得らるゝに至りたる今日、公は公、私は私なりと青年の氣概に生きて、ぼつ／＼ながら心身の修練を心掛くる、又以て可ならずや。

大分我蹴球部の先輩も支那事變に關係し、此江南に出征し夫々その處を得られ御健斗の御様子であります。就中、

我々の畏友荒井兄の名譽ある戦死はわけて我々出征者にとりては痛恨措く能はざる處でありまして、今は既に靖國の護りの神と化せられし兄の御靈に對し萬腔の敬意と謝意とを捧ぐるものであります。

又何時の日か、蹴球部を通ずる先輩後輩一堂に會し、相共に語り合ふ日を偲ぶだにと現在過去の蹴球部を想ひつゝ、旅愁に似た戦愁を時折感じます。

我蹴球部諸兄！

此の波瀾重疊の世界に生を享けたる諸兄は、時代は人を生むの假言に従ひ、此の環境を一の興へられし、生くの條件として、此の環境に調和し、且つ之より超越し、又之に所謂發展性を附與しなくてはなりません。其處には蹴球に於ても教へられる實踐性、緊忍持久、即ち何事に當りても撓まず屈せざるの強き固き精神、又我が身を省みて思惟する道、等肝要必須なる要素でありませう。

學生時代の或ば投機的又超然的な言行も一つの發展に至る道かも知れません。考へつゝ行する。即ち時局の重大なる様態を十二分に心に容れて自重健斗を遙かに祈つて已まぬ次第であります。

窓の下の石疊の上をコツ／＼と深夜の動哨が巡察して來ました。此の事變の爲に如何に多くの人々が私を滅し公に就く可く異境に困苦缺乏に堪へ出征してゐる事だらうか。其處に我々自らの中にも何か神聖なる緊張を覺へて参ります。

部報を頂き唯感じたる儘申述べ御無沙汰に代へます。草々。

(六月十日、端午節日、於江南)

通信

昭十一 水 島 茂

五月二十日

郵船南米西海岸航路の平洋丸は約壹萬噸のモーター船です。MSはSSよりも經濟的との事ですが、絶へず細かな震動を感じますので落着きません。只今本船は針路を稍々北寄りの東に向けて十三四節の速力で走つてゐます。桑港には明後日の早朝入港の豫定です。横濱出帆の時早野君との御約束もありますので、勇を鼓して初旅日記の第一報を書き事にしました。

(一) 横濱 出帆

新緑の故國と暫しの別れを告げたのは去る五月四日でした。横濱港のD棧橋には私達を遙か南米の地迄運んで呉れる平洋丸がその頼もしい姿を現はしてゐましたが、その横に更に巨大な鎌倉丸が船體を横付けにしてゐましたので、流石の平洋丸も馬鹿に小さく見えて一寸がっかりしました。

第一回の銅羅が離別の哀調を私達の胸にひし／＼と泌込ませました時、喫煙室のヴェランダに集つて居られた吉田・吉澤・金井・堀尾・荒川・石割の諸君が早野君の音頭で「長烟遠く……」を力強く歌ひ始められました。眼をつむつて聞いてゐる中に胸が熱くなりました。最後の「いさ勇飛せん五大洲」に至り自分も五大洲の一ツ南米に勇飛せんとしてゐる一橋人の一人たる感を今更の如く新たにされました。諸君の此の御餞別は動もすれば哀愁が先立たんとする私の心に泉の如き力強さを與へて呉れました。

北米航路の龍田丸が午後三時出帆するとその後を追ふ様に平洋丸も解纜した、棧橋を離れました。見る／＼中に隔つて行き見送の人達の顔も忽ち判らなくなつてしまひ、手を、帽子を、ハンカチを、日の丸を振る人々の中に融け込んでしまひました。たゞ蹴球部の諸君の姿だけがその雑沓の中に黒い塊となつて最後迄判然として居りましたので、私達は港外に出る迄ちぎれる様に日の丸を振つてゐました。

急に寒さを覺えて船室に戻りました、船室の番號は一一四番です、父が擔いでいゝ番號だと喜んでゐました。船室で雜然と抛り込れた荷物を片付けてゐる中にヒヨツと窓から海を眺めますと、先きに出帆した龍田丸が黒い船腹に日の丸をくつきり現はして波を蹴つてゐました。

(二) 航 海 (横濱—布哇)

航海は實に退屈です。毎日々々森々たる海を眺めて暮すのですから退屈です。

起きて、顔洗つて、便所へ行つて、食事して、風呂へ入つて、寝て……之を繰返す丈けで他に仕事がないのですから全く退屈です。然し此のあわたゞしい世の中に寸時とは云へ退屈を満喫し得るとは何と贅澤な事ではないかと思つてゐます。

此の贅澤な退屈に厭き足らぬ閑人達は寸時もデツとしてゐません。朝から晩迄デツキゴルフに興ずる者、トランプを闘はす者、デツキチェアーにのび／＼とパイプくわえながら讀書する者——私も或時デツキチェアーに體を投げながら果しなき海を眺めてゐました。未だ日本を離れて間もない事で寒かつたものですから毛布を部屋から持つて来て靴を脱ぎ脚を包みました。その時は何の氣もなく靴を脱いでゐましたが、之は外人間では大變失禮な事だと同行のM氏に注意されました。——陽が照りつける日にはブロードの若い女が海水着一枚になつて惜氣もなくその肢體を焼いてゐます。彼女達の手の爪も足の爪も毒々しい程赤く彩られてゐます。

毎朝ラヂオニュースが印刷されて配られます。西部戦線の戦況が刻々獨逸側に優勢なるを報じてゐます、すると獨

逸人連中が煩い程はしやぎ出します。——日本船は獨人に人氣があるのでせう。本船の一等船客の半數は獨逸人です。残りには我々日本人と、ベルー邊りへ行くスペイン系の人達で英米人は殆ど乗つてゐません。

食事時も話に花が咲いて仲々賑かです。食卓毎に日本語、獨逸語、英語、西班牙語と異つた言葉が交されてゐます。日本船は有難いことに朝は味噌汁、晩は吸物、箱飯、うどん等の日本食が特別に用意されますので、初旅の私達は大變助ります。

船に酔ふ位なら酒に酔つた方がいゝだらうと出帆の時の金井君達の御忠吾がありました、船へ乗るとどういふ譯か酒を飲む氣が起りません。それに最初の二日程は海も荒氣味でしたが、其後はすつかり静かになり、又船にも慣れてしまつて船酔の心配もなくなりました。従つて、臍に梅干をはるとよいか聞いて來ましたがその必要もありませんし船酔の薬もトランクの底に轉がしてゐる次第です。

五月九日の朝デツキゴルフに興じてゐました處、ラヂオニュースが配られ、上田學長の御逝去を知りました。「東京商科大學長上田貞次郎博士は八日朝盲腸炎で逝去、享年六二」とあり呆然としました。あの元氣な恩師が斯くも呆氣なく亡くなられやうとは夢にも思つてゐませんでした、我々一橋人の悲しみ之に過ぐるものはありません。森々たる太平洋上にて遙かに哀悼の意を表しました。

(三) 布 哇

十四日早朝ホノルルに入港しました。十日餘りも陸地を見る事の出来なかつた人達は未明から甲板に出てはしやいでゐました。丁度眞珠灣を中心とするアメリカ太平洋艦隊の大演習眞後でしたので無數の大小軍艦が游戈してゐました。朝霧に浮ぶ是等自稱無敵艦隊の間を我が日の丸船が悠々と進む時「日本對外國」の意識を泌み／＼と懐かされました。

ALOH Aと書いた時計臺が埠頭に見えます。アロハとは歡迎、ボンボヤージュ、今日ハ左様なら、アイラブユー

等色々の意味のある都合のいゝ言葉ださうです。埠頭から邦人經營のタクシーに乗り氣樂に見物しました。ヌアヌパ
リ、ボンチポール火山、ワイキキビーチ、パイナップル園等を廻りましたが之を一々書きますとホノルルの見物の案
内書の様になりますから止めます。たゞホノルルの印象だけを書きとめる事にします。

常夏の國には珍奇な熱帯樹が付きものです。おなじみの椰子、棕櫚、パイヤ、マンゴウから、グロなバンヤン、
ソーセーデトリーもあり、又實に鮮やかな色彩の花咲く樹も無數にあつて、植物學者ならぬ私にも随分珍しく感ぜら
れました。

次に流石はアメリカです。自動車の多いのには驚きました。「ガソリン一滴、血の一滴」も此處ではピツタリ來ま
せん。學生達も自家用で登校する者が多く、布哇大學には日本の中學校等によくある自轉車置場の様に自動車置場が
設けられてゐて何十臺といふ車が並んでゐました。

御承知の様に布哇には邦人が大勢活躍してゐます。三分の一以上日本人といふのですから大したものです。従つて
此處にはアメリカ本國にある様な人種的偏見も餘りない様で街を歩いてゐても非常に氣持がよかつたです。

ホノルルを十四日の夕刻出帆して翌朝布哇島のヒロ港に投錨しました、此處はホノルル以上に邦人が發展してゐる
町で人口の半分以上を占めてゐるさうです。島全體、甘蔗畑と云つてよい位でヒロは粗糖の積出港です。町としては
大したものでもなく見物する處もありませんので、此處から三十哩程ドライブしてキラウエア火山の噴火口に登りまし
た。四五年前も噴火した事のある活火山ですが、今は休んでゐます。規模は非常に大きなものですが、阿蘇を見た私
にはそれ程にも思はれません。此の一帶ナショナルパークになつてゐてドライブウエーの完備してゐる點は矢
張りアメリカです。港を戻つて「だるま食堂」といふ日本人の小料理屋に入りうどんを食べました。本屋にはキング
の六月號がありましたので五十仙で買ひました。

十五日夕刻、出帆宵闇の布哇に左様ならしました。

乍拙文不取敢布哇迄の第一報を御送りします、故國を去るに當り松本さんはじめ二階堂・菅瀬・米山・狩森の諸君
(新調の背廣姿が目につきます)並びに早野首將以下サッカー部諸君には大變御世話になりました。
茲に謹んで御禮申上げます。

通 信

昭十二 枝 村 藤 三 郎

來るべき秋の活躍の基礎を十分に築かれて、楽しい休暇を迎へられたこと、存じます。お便りを戴く度に、苦しか
つた事が楽しい走馬燈になつて思ひ出され、又荒井兄の顔がぼつかり浮んだりして思はず暗然とします。

私、卒業後小學校に二年勤め、昨年三月末から方向轉換をし、只今では銀座の父の事務所で働いてゐます。
サッカーは病氣以來數へる程しかやつてゐません。どうもすつかり恐しくなりました。と同時に父の禁止令を正直
に守つてゐるわけです。興味は依然持つてゐます。今では柄にもなくゴルフを運動にやつてゐます。

日頃御無沙汰ばかり申上げてゐる先輩皆様に、貴重な紙上を拜借して御詫び申上げます。
末々、秋の健闘を祈つてゐます。

雜 念

昭十三 大 掛 隆 久

陸軍病院に入院して以來七ヶ月餘、其の間皆様から御心配を頂き乍ら御無沙汰に打過ぎて居りましたが、幸ひなる哉負傷も完全に治癒し近々原隊に復歸するに當り、部誌の原稿を依頼されましたのも一つの機縁と考へまして雜感なりと御傳へ申上げ、平素の御無沙汰の御詫びに代へ度く考へ筆を執つた次第であります。

我々は陛下の御召により軍人として立上つたのであります。不幸足を痛めて以來陛下の有難い御思召により療養の機を興へられ、専心療養の結果全治し、陛下の御思召に副ひ奉る可く立上る事を得た譯であります。之が私の入院生活の全部であります。

「朝ニ恩遇ヲ蒙リ夕ニ焚坑セラル、人生の浮沈ハ晦明ニ似タリ」。西郷南州が沖永良部島に流され浮囚としての苦難を味はつて居つた時に於る彼の魂の絶叫の一節であります。變轉究まり無い人生に處して猶泰然たる可く、吾々は自ら一つの安定せる「場」を創造し、此處を己が魂の住家とする事が必要であります。生死も名譽も地位も利慾も總て亂す事能はざる「場」とは而らば何か。之こそ吾々が生活を懸けて求めて已まざる絶對的境地であります。此の境地に徹するを得ますれば與へられた環境に順應しつゝ絶對的な生き方をする事が出来る譯であります。

機運を得れば誠を以て動き、機縁を得ざるも亦誠を以て貫く。「縦ヒ開運セザルモ葵ハ日ニ向ヒ、若シ開運スル無キモ意ハ誠ヲ推ス」。南州が論破致しました眞理は味はつて餘り有るものが有ります。

蹴球をやりますにも右に云ふ「場」の創造の手段であり、卒業以後の生活も自我修練に關する限り純然たる蹴球部生活の延長でありまして、吾々先輩は社會に出でて働きつゝ蹴球部を思ひ、軍隊生活を爲し乍ら蹴球部を想ひ、私の如く病院生活を致して居りましても矢張り蹴球部を惟ふのであります。

蹴球部を思ふ度に私は部の建設者としての松本先輩等大先輩と、現在の蹴球部を實現せしめられた長瀬先輩を思ふのであります。長瀬先輩が不歸の客となられた當座は餘りに大きな悲嘆の爲私は考へる事すら出来なかつたのであります。大兄世を去られてより既に三年、耐へ難い悲しみは自ら鎮まり乍らも、想ひは事毎に新たなものが有ります。長瀬大兄は實に不出世の英傑でありました。年若くして既に廣濶にして不動なる信念を確立せられ、素晴らしい人格を練成せられ、以てある可き蹴球部、即ちある可き世界を創造する機縁を造られたのであります。今にして思へば夫は一つの革命でありました。蹴球を愛さざる部員の居る事が蹴球部の蠱毒たる事を看破せられ、眞に蹴球を愛好する士を糾合して、力強い蹴球部の新しき第一步を實際に踏出さしめた處、英傑長瀬の面目躍如たるものが有ります。以後吾々後輩を教導せられ凋落せる蹴球部精神を昂揚せられて來たのであります。此の精神は根本的には未だ部員同志の魂の交流に依り傳へられて居る事と信じ、又永久に傳へられて行く事を祈つて已まぬのであります。

惟ひを肇國の昔に放す可しとの趣旨と均しく諸兄等は再び思ひを部の建設頭初に馳せ、蹴球とは何かと云ふ根本問題を兄等自身の心を以て納得の行く迄考へ且つ所信を實踐して欲しいと思ふのであります。

「蹴球部は他の運動部と異なる性格を持ち、眞面目な立派な運動部であり、密かな和を以て其生命とする」。とよく申されて居ります。然し目標がいくら明瞭に見えても決して到達し得たのではないのであります。殊に若い人達が此の様な立派な言葉を口にして居られるのを聞きますと「良く分つて居るな」と喜ぶ反面何か安心し切れぬものがあります。

眞に體得した人の言葉を丸のみにして安價な知得の域に満足する事無く、身を以て體驗しつゝ思索する事に依り體得せられ、頭から出る言葉ではなく、腹の底から迸り出る言葉にして欲しいのであります。

豫科時代を回想致しますと懐しさで胸一杯であります。一日の練習が終るとよく長瀬先輩を圍んで話を聞いたものであります。其の卓見に「成る程なり」と感嘆し諄々と説かれる熱意に感奮したものであり、御卒業後も機會有る毎に御詞を教へとして謹聴したものであります。

其の後色々な事態に實際にぶつかつて見て長瀬さんの言葉は段々と意味深くなつて参り、私の心の内に住まはれる長瀬さんは日毎に大きくなつて行かれるのであります。

昨年九月滿洲から歸宅し家に寄つて後眞先に掛けて行つたのは染井墓地でありました。何時行つて見ても新しい御花の絶へた事無く長瀬大兄の遺徳の大いなるに今更乍ら驚き入るのであります。

無事に御奉公を濟ませて歸へる事が出来ましたならば、一升びん持参の上墓前にて盃を交し度く考へて居ります。眞の交友を得るは蹴球部生活に於る一つの特權であります。蹴球部生活六年の間も友に恵まれ、友は何物にも代へ難い寶となつて居ります。

楽しいにつけ苦しいにつけ友の有難さは増すばかりでありまして、友と語り合ふ内、私の心は友の心の中に入り、友の心は私の心の中に喰ひ入つて来て、其の間には自他一如の廣大無窮の境地が拓け、茲に眞の自我の姿を伺ふ事が出来るのであります。斯る境地を共に創造し得る友には無限の感謝と信頼とを置く事を得るのであります。一度此の域に達するを得れば無言の中にも常時相通するの感あり、興を覺ゆれば便りし、機を得れば飄々と訪ね、黙して對するも心自ら通じ、共に放然と思索し突然として語るも寸句にして心直ちに相通するのであります。事有れば激論するも自ら一に歸するは恰も時に嵐を呼び波濤を生ずるも、自ら靜に歸する深山の湖面に鬢髯たるものが有るのであります。

友を選ばず書を読みて六分の俠氣四分の熱
友の命を探ぬれば義のある處火をも踏む

交友を以て人生幸福の一に數ふる亦宜なる哉であります。

逢ふは別れの始めと申しまして離別は人生に大いなる悲哀を與へるものであります。而も此の悲哀を止揚すれば茲に掬して盡し難い含蓄を見出す事を得るのであります。我國の藝術の一高峯をなす茶道に於いて、一朝一會の極意と云ふのが有る由であります。之は恐らく此所を深く掘り下げた味はひであると思考するのであります。

定め無き人生の常として、明日の命も計り難く、今日の自分は明日の自分に非ず、吾々を取圍む環境も時々刻々變更して止まる事無きに思ひを致しますれば洵に一朝一會でありまして、今日の會席は今日限り、今日の練習は今日限り再びめぐり來らぬのであり、人生は離別の瞬間の連続であります。一朝一會の極意は恐らく人生の極意でもあらうと考へられるのであります。交友の中で最もむづかしいのは別れでありまして、互ひに語り合ふ間は千變萬化して究まり無く恰も定無き浮雲の如く、相別れて後始めて己が心に沁み入り落付く感があります。而して雜然たる中より抜んで定まるものは離別の心如何に依る事大なるものが有る様に存せられるのであります。心無き別れとすれば殘滓の如きものが心に残るに過ぎず、餘韻嫋々なる別れをすれば、美しき想ひ出は永久に心に留るのであります。

熱海在院中、小西君と吉澤君が態々見舞つて下さいました。部の狀況を聞かせて頂いたり心に沁みる様な話を聞き又語る事は非常に嬉しい事ですが、何より嬉しかつたのは遠い所を見舞つて下さつたと云ふ一事であります。黒潮躍る太平洋を前にして楽しく語る事數刻、梅香る門前にて相別るゝ時、微笑の内に一瞬黙として相對し、身を翻せば一顧をも與へず飄々として去り、此の中に無限の情を含むのであります。

又尊敬をく能はざる二階堂先輩を巢鴨のお宅に訪問した時の事ですが、玄關先迄出られ端然と座され御見送り下さるのであります。庭をよこぎり木戸を閉めんとして願れば、猶端然と姿をくづさず御見送り下さる。此の一事が私に何れ程大きな教訓を與へたかは計り知る可からざるものがあります。此の會津若松の病院に参りましてからの事或る日曜面會人有りとのお知らせを受け、近地に知人無く、訪れる人として無い私に、果して誰であらうかと思ひ乍ら

逢ふて見れば米山君であります。入社早々にて多忙極まりない事を知つて居る私は「どうして訪ねてくれたか」と思はず愚問を發せざるを得ませんでした。

多忙中、貴重な土曜日曜とを犠牲にして見舞つて下さる有難い友を持つ仕合せを思ふ毎に全く涙流るゝ思ひであります。北國の春は遅く、丁度櫻の眞盛りであり、櫻並木の街道を振り返り、去つて行く友の姿は一幅の名畫の如く心に焼き付いて居ります。

此の様に美しい別れによつて純化せられた印象は、一生國寶として心に留まるのでありまして、此の心は武道に於る所謂殘心の極意に一脈相通する處があらうと愚考致します。

餘韻翳々たる殘心の極意が蹴球に働けば、一發シュートを極め乍ら猶ゴールに究進し、假令タツクルを外されても猶相手の突進をはゞみ得る含蓄あるプレイが出来る様になるのではないかと夢想は果無く續いて行くのであります。

一度陸軍病院を訪ねられた方は誰しも感ずる事であらうと存じますが、手を失ひ足を失ひ或ひは目を失つた戦友を見ますと全く何とも云へぬ氣持に打たれるのであります。皆様は彼等を見て「氣の毒だ」と云ふ氣持が一番強く感ぜられる事と存じます。全く彼等は戰場に於て耐へ難い苦勞を味はつた後片輪として一生の負擔を負つたのであります。而も彼等は實に明朗でありまして、共に寢臺を並べた私に日本人の偉大さを思ひ知らせてくれたのであります。陰鬱な諦めではなく苦惱を突破して安心立命に到る「諦觀」が如何に廣く會得せられて居るかは此の一事に依つても明瞭であります。宗教の心髓は其の故國である印度に現存せず、支那に存在せず、唯日本にのみ生きて居ると申されて居りますが肯首するに足るものがあると存じます。

物が足らぬ統制が固苦しいと不平を云ふ心は、戦線の將兵に想ひを效せば輕薄な心であり、傷兵の心事を忍べば洵に甘いものであり、戦線に華と散つた戦友を惟ひ遺族の心情を察すれば、云ふ言葉を知らぬのであります。

戦線に働く將兵の苦勞は實際に體驗して見なければ分らぬものでありませうが、唯一言云ひ度い事は、國民全般がもつとく親身になつて戦線の將兵の苦勞を察し、護國の英靈に惟ひを留めて欲しいと云ふ事であります。國民精神の廣潤なるは洵に喜ぶ可き事であります。然し大使命に邁進しつつある國家の國民として餘りにも甘過ぎる所はないでせうか。精神廣潤なる美名にかくれた不見識な行動が餘りにも多過ぎはしないでせうか。如何でありますか。

會津の地は多分皆様良く御存知ない事と思ひますので少し御紹介申上げませう。會津磐梯山は寶の山よ、笹に黄金がなり下る、と云ふ民謡で知られ、又彼の伊達正宗が秀吉の傘下に參するに先立つて、己が平定した會津平野を鳥瞰し名殘を惜しむ可く登つた奥州の名山盤梯を東化に望み、其の麓に千古の謎を湖底に秘める猪苗代をひかへ、北に萬年雪を頂く靈山飯豊山を眺望する會津盆地は美に恵まれた平和境であります。東北地方に旅する人は誰しも感ずる所であらうと存じますが、奥羽の自然は重苦しい重壓と、夫丈けに莊重な美とを吾々の心に植付けるのであります。恐らくは之が東北人の性格を特徴付けて居るのでありませう。

私が此の地に參りましたのは三月の末、東京の櫻はそろ／＼葉櫻になつた頃でありましたが、當地は猶春淺く、盆地をめぐる山々は白雪に蔽はれ、春のきざしが暫く見え初めた里には、櫻の蕾がやつとふくらんだ頃でありました。

旅人の心をなぐさめるのは地方の純朴な人情であると申しますが、私も此處の人情の美しさに接した事は非常な喜びでありました。東京の病院では最近慰問に訪れてくれる人々が急激に減つて參りましたが、當地の病院に来て見ますと、モンペ姿の乙女等や婦人會の人々が大勢毎日の様に訪れ、好んで患者の衣服をつくるひ、争ふ様にして洗濯をし、華やかに談笑する事もなく黙々として歸つて行くのであります。田植も近付き、春蚕の仕事も忙しく、東京の住人に比較すれば此の邊の人々は問題にならぬ程忙しいのであります。而も斯る状況は事變勃發頭初と何の變りもないと云ふ話を聞きまして、當地の純朴にして持久性に富む尊い人情にすつかりほれ込んでしまつたのであります。

精銳無比の日本軍の中で最も精銳なるは二師團の兵であると云はれて居ります。彼等は都會の人間に比較して見ますると、所謂人付きの悪い事は相當なものでありますが、深く付き合つて見ると都會人の持ち難い良さを持つて居る

人が非常に多い様に見受けられます。何んな苦しい演習でしぼられても不平一言口に出さず何んなまづい飯を喰ばされても、うまいかまづいか分らぬ様な顔をして居り、麥飯と味噌汁と漬物さへ有れば丸々と肥えて居るのであります。此の様な兵隊が戦争をすれば強いのは當然でありまして、彼等をはぐくみ育てた地に歸つて見て此の感は一入強いのでありませぬ。

四月に入ると鶴ヶ城趾に残る老櫻にも春が訪れ、古城趾に咲く花は此所を訪れる者をして懐古の情禁する能はざらしむるものが有ります。城趾をめぐる堀は満々と水をたへ、石垣は未だ昔日の偉容を思はしむるものが有り亭々と聳える老杉の幹に残る弾痕は、戌申の役の名残を留めて居りますが、華かなりし高樓の面影既に留むる由も無く、有るか無しかの春風にはらくと散る櫻花は一入哀調を深めるのであります。

城趾の東北約一里に飯盛山が有ります。十有九士の少年軍白虎隊が城に上る火煙を望み、悲憤の血涙を顧みつゝ腹を屠つて斃れた忠烈悲愴なる心事を忍びつゝ青葉にはゆる飯盛山を眺望すれば、一顧茫茫唯夢の如しであります。

「俺達は口では立派げな事を云つて居るが、俺達の弟の様な彼等程立派に腹を切る事が出来るだらうか」
「仲々出来るものぢやあないね」

「吾々現代の青年は明治維新前後の青少年に比べ確かに甘く出来て居る事は否めないね」

白虎隊を語る毎に話は何時も茲に落ちるのであります。白虎隊に對する批判は色々であります。兎に角社稷の爲に一命を投ずる信念と氣魄とは實に日本精神の精華でありまして、此の精神を擴充すれば現在に於て其の儘吾々の心の依り處とする事が出来るのであります。友邦イタリの親方ムツソリーニが白虎隊に心酔して記念碑を贈つて寄越した事は洵に嬉しい話の一つであります。確かに吾々は死に對する覺悟を定め、徹した腹を養はねばならぬ事を、ひし／＼と感ずるのであります。

花が散り始めると、落花の雪の相間に新芽がのぞき出し見る見る青葉の世界となり、一片の隙もない大自然の動き

を見る感が有ります。會津名物不知柿の若葉が初夏の陽光に輝き、桑の實が實り、農家の庭先の櫻桃の實が赤味を帯びて来る頃になると、山麓から「カツコー鳥」の聲が朗かに聞えて参ります。

勉むる者は進む

如何なる時期 如何なる場所を問はず

眞摯なる心構へもて積みたる努力は

必ずや自我の内に統一せられて力量たらん

苦惱即登行の證なるを自覺せば

精神脈々として躍動するを感ぜん

即戦即快大いに可 堅忍持久之亦可

此の兩端を貫き生きるは何ぞ

誠心か 誠心か 然り

秋の飛躍に備へて礎石の着々と積みれ行かん事を祈念しつゝ筆を擱きます。

昭和十五年七月四日

會津若松陸軍病院にて

部誌の歴史

昭十三 村 井 恒 典

部誌の原稿をお送りします。短い時間ですが一生懸命考へてない頭の中を總動員して見ました。近く〇〇の方面へ行

く事になります、或る事情で一月延びて居ます。あちらへ行つたら荒井の戦歿した所へも行けるでせう、二階堂、神野兩君にもお目にかゝれると楽しみにしてゐます。

部の皆様方色々苦勞がお有りでせうが元氣に困難を克服して下さい。色々理窟もあり言ひたい事もあるでせうが、僕としては現在諸君の持つて居らるゝ美點を益々のばして濁れる世の中に毅然と生きて行つて下さい、とは申し乍らこの世の中は決して濁つては居ないと思ひます、溷濁の世などと言ふのは半可通の言ふ事で良く見ると世の中の人達は皆美しい人達です。

毎日何とかかとか過ぎて行きます、もし國立が此處から十分位だつたら毎日練習が見られるのに少し遠すぎます。本三の諸君、秋の爲全力を盡すべく生活の計畫を春の中に建て、置く事です。具體的に言ふと就職先を考へておく事、之は決していやしい事ではなく、反つて神聖な事と思ひます。自分の一生の仕事にその全力を盡すのは極めて美しい事と思ひます。豫科の人達は元氣に本科生を頼つて行く事(盲従ではありません)自分獨りを偉いと思ふのや只無節操に日々を送るのはどちらも感心出来ませんから、當分ゴタ／＼して御無沙汰するでせう悪からず。

三宅引方氏は仙臺、田島氏は熊本、津田弘精氏は伯林、其の他居所の分らない人は有りますが、出来る丈知らせします。それから藤井先輩は應召、少ない先輩ですからせいか／＼連絡を絶さない様に數名で手分けして完全な連絡網を作つては如何、又如水會報には面倒でもママに部の消息を記載して下さい。廣い視界は常に必要です。

部誌を出すからは原稿締切は何日迄と言ふお達しを受ける、どうせ出す部誌而も一冊貫ふ部誌なら何か一つ位自分の意見ものせたい。思ひ出すと、何年前になるが我々が歩調を合せて一部進出に専念してゐた頃部誌を作つて相互の魂を磨き又一方蹴球に關する研究乃至は意見をこの誌上に發表しあつて技を磨く一助にしたものだと言ふ考へを皆が皆揃つて心に抱いた。そして實行委員と言ふか田島が之に當つて皆で案を練つて創刊號が誕生した。何にしる印刷代は高いし紙代も高いしプリントにするか活版にするか迷つたものである。そして苦心の末出来上つたのが皆さんの見る創刊號だ。扱て我々の手で作つたこの愛すべき部誌蹴球精神の權化も原稿募集の頃になると仲々原稿を呈出した

い、猛練習の結果ペンを持つのさえ面倒になる現状又無理なかるべしと思ふが折角築き上げた蹴球理論又は蹴球を通じて把握した人生觀世界觀を自分の一人占めにするのは甚だ利己的である、と言ふパラドックスをでつちあげて諸君の愛部に訴へる次第である。所が扱て自分も何かと言はれるとハタと困惑する、何を書いて良いやら、最近の部誌を開いてどんな事が書いてあるかと眺めて参考にせんとと思ひ第一頁を見ると寫眞がある。之は良い、尤も寫眞は金がかかるゝが、後は皆自己の蹴球觀乃至は人生觀を大膽に描破してゐる。之が全部極めて尊い純眞な考へが開陳されてゐる、「之程までに」と思ふと何かは知らず頭が下る、所が俺はかう言ふ書き方は極めて苦手でまして論理正して二つの觀念を紙の上に書く事は不得手である。まして最近の小生の生活状態は斯る事を許さない、大掛が熱海に居た頃手紙で二、三回僕の意見を交換したが我ながらその器にあらず、又やり度くもなくなつたので止めた、どうも筆は口程に役に立たぬ。

扱て横道に入つてしまつた。この創刊號の時の田島の苦心は非常に多とすべきで大いに感謝してゐる今熊本の聯隊に田島班長として新たな部誌を送られたら彼たるもの軍務の餘暇は感慨無量だらう。次に思ひ浮ぶのは川村さんである、部の創立當時の大先輩を田島の次に思ひ出すのは甚だ申譯ない次第であるが、田島と一諸に石神井時代を過した小生にとつてやはり近いものを先に思ひ出し、且部誌を作らうぢやないかと最初に相談したのが田島であつた關係上お許しを願ふ。

扱て川村先輩はその創立時代の苦闘を流麗なる文章で書き下された。文章許りでなくこの先輩の口から往年の角帽時代の松本先輩其他幾多の先輩の面影を偲ばせて頂いた。その他往昔中大兄皇子と鎌足の蹴鞠の考證等この先輩の文章が部誌に加へた精彩は多大のものである。今健康を害ねられて療養して居らるゝ先輩のお手許に新部誌が届く時、又この先輩の快方に向はせられる一助ともなればと神に祈る次第である。

神に祈るとなると故渡邊先輩は既に神になられてゐる、我蹴球部の功勞者の中如何に神去られた方々が多いか、渡邊先輩もそのお一人である。渡邊さんがその病褥から如何に田島の仕事を後援して下さつたか田島の文章により十分に伺ひ知る事が出来よう。我部の苦闘時代の歴史、好評も悪評も一身に負はれた渡邊氏は又一つの歴史であらう。

創刊號、二階堂先輩の武士道のお話。兵營より見た我々の部生活、現在の我身を省みて益々この方の偉大さがわかり頭が下る、驕兒十分一でも二階堂氏に近づければと思ふのは分不相應であらうか。長瀬さんの電報に書簡に惨み出る愛部心、片言隻句の七首の鋭を持つて我々に迫つて来る、幾度かその電文に便りに激勵され感激したか、この先輩も今や亡し、往年石神井時代の勇猛なその闘志、角帽の下から洵々と語られるオハナシ、又は九州戸畑での數日、扱ては又腰越の一日から神宮外苑帝大に完敗した時の口惜しさ、更に又突然の急逝アタフタと今は朝鮮に居る鈴木と馳せつける電車の中、告別式等部誌を手によれば盡きぬ追憶、之はこの偉大なる先輩と共にグランドを馳廻つた者一同の感慨であらう。見よ長瀬兄追悼號の如何によごれたかを一人靜かに書齋でこの書を聞く時眼をつぶつても浮びだす言々句々、この一冊は實に六年間の歴史である。

感寧の野に散つた荒井の流るゝ如き名文も隨所に見出せるがこの一冊は本棚の一角にそつと置いてある。餘りに生々しい彼の追悼號は明けずに置いとかう。何人か、荒井の死を信ずる事が出来様か、それ程彼は生きてゐる。故人の長瀬さん有りし日の長瀬さんを靜寂の中に追憶できる自分がそして果しなき迷想に四邊は夕暮の迫るを氣づかさる自分が荒井の事になるとその死をとて靜かに考へる事が出来なくなる。練習日誌に彼が書いた一句、夏の合宿の一日「芋の葉が露のホロホロと落ちるのも淋しく、秋か」この一節が荒井の陽氣な荒井の内面を遺憾なく現してゐる。どの部誌にも荒井の姿が表れてゐる、その元氣な而も淋しい彼の姿が乍併その追悼號となると恐いものは伏せて眼を覆ふ、豈俺一人のみならんや。

扱て部誌を初めから巻を追ふて通讀して見結へ、そこに何か移り行く人の世の縮圖が見られないか。東洋史にも西

洋史にも人類の歴史には榮枯盛衰輪廻がある。四周より壓迫された一小國が英主の下四圍を席捲して一大帝國を建設する。やがて文化は榮え宗教興り哲學榮え文化は爛熟する、そしてその頂點より内部的に又外部的に或る力が作用して來て文化は崩壊して次の權力に移る、乍併一國の運命の有爲轉變に拘らず人類は絶えず進歩發展して行く如、何なる英雄も碩學もこの大自然の運命の前には如何とも爲す能はず、徒らに先見の明を誇り一世の經綸を行ふもさめては一場の夢荒城に月を見る。一體全體我々の部はその輪廻のどの邊を進んでゐるのか。

僕は只の運命論者ではないが運命の大なる力を知る、天なる哉、命なる哉、運命の定める所に従ひ、己れの分を盡す。人呼んで現實主義と言ふ、自らその近路を定め運命を開拓し、或は之と戦ひ、或は之を知りて情熱を持つて自己の目標に直進する勇氣の保持者理想主義の力、生活力。

そんなものが部誌を通じて散見出来る。宗教家は多く現實の運命を知り武人英雄は理想に直進する。中世日本の僧兵又は泰世の寺侍の如き現實主義の權化、鼻持ならぬと同時に古くはアレキサンダー、ナポレオン、成吉思汗の理想は如何許りこの世に跡を残したか、蒙古はマケドニヤは、フランスは今如何に、近くはヒトラー、ムソリーニも百年後は如何、理想に進む者の華やかにしてその脆さ。

最大多數の最大幸福、博愛主義の自己主義者奴、人間の考へ方など色々の主義學説はあるが結局同じもの、眼に角立て、争ふより外に生き方はないのか、

豫科に入つた時虫も殺さぬ顔をしてゐたのがやがて一應も二應も理窟をこね、角帽を帽り、脊廣に衣替へる、同じコースを踏んで行く人間、六冊の「蹴球」を手にして一日靜かな一室で冥想にふけりながら讀んで見給へ、何とも言へぬ、或るものを感じる。幸ひなる哉、蹴球部に籍を置きこの部誌を創立したる、一方の手には六年間球と生活を共にした人々の面影を偲べるアルバム有り、じつと見入れれば果てしが無い。現役も先輩も一度やつて見給へ、特に夏休みにでも讀んで見給へ。

小生が軍務を終へて歸つたら書きたい種本が三四冊ある。小生入學以來の諸先輩同窓の逸話だ、仲々面白いのがあ
る、追つて紹介しようと思つて空手形を發行する。

(一五、六、四)

通 信

昭十四 後 藤 虎 雄

爽やかなる初夏新緑の候を迎へて益々御元氣に御活躍のこと、想像して居ます。

叔、突然廣島陸軍病院より便りを差上げ貴君を驚かす、小生の御無沙汰を申譯なく思ひます。渡支以來、極めて頑
健に教育を受けて居りました、小生誠に残念乍ら去る四月中旬より輕微なる濕性胸膜炎(地方の所謂肋膜炎)に犯さ
れ、現地の陸軍病院にて療養を續けて居りましたが、その後轉々として後送され、北京を最後として遂に内地還送を
受ける身と相成りました。先月二十八日當地着、以來當病院に療養の生活を致して居ります。

入隊以來、身體の強健を以て自らひそかに誇りとして居た、小生にとつて、誠に意外とも残念とも言はれぬ氣持で
あります。

教育中であり、未だ一度も戦線に立たずして白衣を身にすることを、如何に心苦しく思つたことか。更に又、昨年
の暮、必ずしも生還を期す可からずと決意して出發した故國の土を再び踏むことに成つた小生が、感慨無量と申すよ
り他に言葉がない心境に在ることも御想像願へると存じます。誠に第一線に残した戦友の上に思ひを馳せるとき、萬

感胸に迫るの情を禁じ得ません。病狀は至極經過良く唯今では全く元の健康體を取戻して居ります。

近く、原隊たる北海道旭川市に轉送されること、存じますが、再起御奉公の日を深く心に期して居ります。僅か三
ヶ月の教育期間でありましたが、小生にとつては實に尊い現地の軍隊生活でありました。戦争は決して我々が考へる
様なロマンチックなものではないし又、一種被虐的なセンチメンリズムでもなく、實に現實のさびしさそのもので
あることを小生に教へて呉れました。而も兵隊は何れも戦争の嚴肅さを意識するとも決して此のきびしさに負けては
居らず、新聞雜誌に見られる明朗さを隨時隨處に發揮して居ることであり、頼もしくも力強い限りです。

先月、春の合宿最後の晩に認めた清水、荒川兩君の潑刺たる便りを誠に嬉しく拜見した。張切つた部の空氣が想像
されて、病床に在るを忘れて興奮してしまつた。又、その後部報も有難く頂いた。なつかしい部の消息、部員の動向
など、嬉しい限りでした。今年は貴君を中心にしてガツチリと團結した力を以て優秀なる戦績を擧げて呉れるものと
想像して居ます。

部の指導者として貴君の御苦勞を充分察し感謝して居ます。幸ひ新先輩が四名在京して居ることは、定めし力強い
こととせう。

もう一ヶ月でシーズンオフになる事と思ふが、秋に備へる準備期間として皆張切つて居ること、思ひます。貴君等
も愈々最後の年だが心残りない様御奮闘の程を祈つてゐます。同時に來春より實社會に於て活躍することゝて、十分
なる心構へを有たれることを、潜越乍ら、先輩の末席を汚す一人として申させて頂きます。時局の大きな力は貴君等
の生活にも次第に大きく作用して行くものと思ひます。蹴球を通じて、是に處して行く自己の生命力を認識し保持し
て行く様、お互に努力致しませう。

申上度の事は山程あるのだが、又次の機會に譲りませう。

貴君始め部員諸君の御健康を心からお祈り申上げて居ります。小生も『病める虎』として終らぬ様努力致します。

部員諸君に元氣で居る旨御傳へ願ひます。

では又、取急ぎ近況御一報迄。早々。

(早野宛)

通 信

昭十一 北 支 神 野 清 一 郎

前略、諸君の元氣な寄書有難う。

昨秋の引分けを本秋は勝利へ、諸君一年の努力の蓄積がこの一戦に明確に現れて物凄い商大の躍進の姿を認め嬉しく思ひます。

松丸氏のタイムアップの笛を聞いて感激の涙に、選手サブスタンドから走り集つた狂喜の先輩の諸君が、ガツチリと組んだ商大蹴球部の姿があり／＼と見えます。

この日後藤君からの便りと共に帝大打破の新聞を手にして我知らずにヨシと力強く叫んだのでした。

この日のバック諸君の御奮闘は並々ならぬものと思ひます。愈々リーグはこれからですから、攻撃は最大の守備を第一主義としてフォアード、バック一丸となつて飽くまで攻撃に邁進して下さい。これからの練習は有らゆる要素を綜合して敵ゴールに幾點でもブチ込む意氣を以て入れられても必ずより多くをブチ込む戦闘力と自信と技術を作つて下さい。

攻勢に轉じたならばバックも思ひ切つて積極的に行動し、フォアードをして得點せねば置かぬ迫力を以て臨む事が必要と思ひます。

フォアードは逆襲攻法に既に幾つかの型があり商大が得意とするもので相當の練習が既に爲されて居ると思ひますが、敵ゴール前迄は幾度も持つてゆくが、最後に無駄にしてしまふことが缺點で、最後に飽く迄、敵ゴールに執着を持つことです。昔淺枝君がセンターで活躍した時、このゴールへ執着力が強かつた。練習の時にでも身近に轉つて来る球を必ずゴールの中へ入れなければ止めない。何んとかして入れるべく體の位置、角度其他種々の研究を自己の體に就いて正確にやつて居た。靜止した球がいくらゴール前で蹴れても試合にはそんな球は無い。フォーメーションによつて出来る、種々なる轉球を無駄にしないでゴールへ入れる不斷の研究を淺枝君に學び度い。今になつて自分もそんなことを痛感する。

長瀬先輩の有らゆる練習は實戰的にして始めて試合に使へるものが出来ると云はれたのに盡きると思ひます。今になつてこんなことを言ふは一笑の種に過ぎぬと思ひますが、つい張切つて了つて書いて了ひました。これが自分の氣持です。

必勝の信念を不斷の研究と練習から築き上げて下さい。

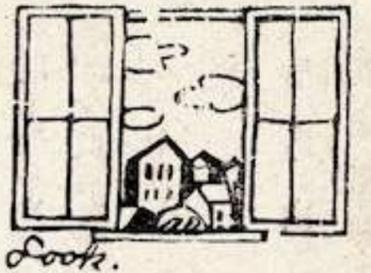
何時も變らぬ松本先輩の御盡力を感謝し、大掛、後藤兩君の戦傷を深く御同情致します。

諸君の元氣な御奮闘を祈ります。

十月十六日夜

早野 主將 外

蹴球部御一同様



部員感想

浦高戦を終へて

豫三 青木育郎

遂に浦高戦は引き分けに終つて了つた。四月以來、只一筋に目指して勵んで來た結果としては、それは私にとつてどうしても、あきらめ切れぬものである。しかし今戦の跡を省りみる時、それを招いたものは私自身の怠惰の中に宿つてゐたのではないかと言ふ感が、しみんと湧いて來るのである。口に猛練習を叫び、打倒浦高を叫ぶ事は容易である、しかし私の過して來た練習は果して俯仰天地に恥ぢぬものと言ひ得るであらうか、私は

それを思ふ時本當に心の底から慚愧に堪へないのである。體の痛み、コンディションの不調、それは結果に於て怠りと同じである。私は全てのものを超越して練習しなければならなかつた。私は總ゆるものを踏み越えて精進すべきだつた。技術の拙い私にとつて氣分に一點でも隙のある時は私の蹴球は零である。

廣く豫科チーム春の戦を顧りみる時、私は暗然たらざるを得ない。本科チームの精彩に引き較べる時、豫科チームの劣勢に驚かざるを得ない。我々が全一橋を存負つて立つ時、果して從來の榮譽を守れるであらうか、早野主將が春季合宿の最初にあたつて特に中堅部員の奮起を望むといはれたのも、その考へられる所は、此の邊にあるのではなからうか、我々は只管精進しなければなら

い、そして傳統を死守せねばならない。

今シーズン豫科は戦に敗れても本科の人から一度も叱られなかつた。皆よくやつたとのみ言はれた。しかし我々は本科の人に叱られない、よくやつた、と言はれる事に決して甘やかされた様な氣分になつてはいけない。試合は勝つべきものである。戦に敗れて悔ひなしとは第三者の言ふことである、戦に敗れたものが自己の善戦を思つてそれに満足する時は一步の墮落である。本科の人がよくやつたと言つて下さる心に對してそれはあまりに、ひがみ根性かも知れないが、我々はそれを皮肉と思つて反撥するのだ、そしてそこに進歩の道を見出すのだ。來るべき秋のシーズンこそは、六月十八日に浦高のグラウンドで哭いた時の氣持を胸に秘めて、死物狂ひでボールを蹴るのだ。

(六、廿)

感想

豫三 吉岡敏夫

皆部誌の原稿を書いて出して呉れと言はれたがどうし

ても書けない。體を損じて運動部生活のすべてであるグラウンドの生活をして居ない者が練習について、試合について、部生活の諸般について等大きな顔をして、實際に苦しみつゝ又悦びを感じつゝ球を蹴つて居られる諸兄の前に書いたり話したり出来る筈はないと思ひます。が許して戴いて簡単に感想を書きます。これは特に新しい人々に述べたいと思ふ事でありまして、自分が至らぬ解釋をもつた爲に時に部生活に對する疑問さへ懐くに至つたのでありますが、その時その救ひとして持つ様になつた考へ方があります。

我々は入部した當時部の先輩、上級生諸兄から懸命にサッカーをやれ、馬鹿になつて球を蹴れと言はれて來ました。そして今も同じく言はれて居るのであります。それは學生としてのスポーツマンの生活をしろ、より高い人格形成に向つて精進しろといはれる事であつて、決して勉強はするな、理論的なものへの憧憬や尊敬等はかなぐり捨て、しまへ、といつて居られるのではないのであります。もしさうでないとしたならばそれは國家乃至は社會から學生として與へられたその特權に對し何等報い

る所がないのみか、かへつてその期待を裏切るものではないかと考へられます。學問しない學生は走らない馬とか、泳がない魚の如く自己矛盾的なもので存在を考へることは出来ないのではないかと思はれます。

商大サッカー部は一つの協同體として把握されねばならぬと屢々言はれるのでありますが、それは學生として近き將來日本民族の指導者たらんとしていはゞ運命的に結合された協同體と理解されねばならないのでありまして、單なる運動それ自身を目標とするいはゞ現實逃避の共同動作をとるものゝ協同體とは考へられてならぬものであります。かくの如く先輩、上級生諸兄は蹴球部なるものを考へて來られたものであると信じます。この點が注意せられなかつた爲に、今まで不幸にも退部せられる人があつたのではないかと考へられます。

かく考へると次に外面的に——實は又本質的にも——勉強と運動との矛盾、時間的、肉體的の矛盾はどうすべきかといふのは大きな問題でありましてこれは即ち

(一) その個人がその中にある協同體としての部に個性をまげて服従の形をとるべきか。

反省とは僕の場合には、自分の生活を自分が、リードせんとする強い意志の現れなのであり、又反省は必ず自分の生活をリードせねばならぬと結果されるのである。

僕は自分の缺點を良く知つてゐる。それは、徹底出来ぬといふ事である。僕の日記帳は同じ事が繰返し書かれてゐる。豫科二年半の間僕を悩ましてゐる問題は同じ事なのである。

此の様な焦慮の感に捕はれると周りの人が眼について來るのである。あの人は將來の飛躍が約束されてゐるのだらう。あの人は、一歩々々足を踏みしめて歩いてゐるではないか、自分だけが前進しない。俺だけなのか。

僕は徹底するといふ事は、或は死を意味するといふ事を良く知つてゐる。然も今の様な生活は蹴球部員として許すべからざる生活である事も知つてゐる。

雑念

豫三 土屋 五郎

私は、技は甚だ未熟であるが、本當にフットボールが

(二) 協同體の規範を押しつけて或程度自由に行動すべきか。

(三) 又は、それらの方向をも受け入れられるべく協同體全體の方向を變へるか。

の問題となるからであります。しかし(二)の方法をとることはさうする事自身すでに協同體の一員たる事を自ら放棄したことゝなりますからこれは容認されません。よつて我々には(一)と(三)の二途のみが問題となつて來るわけであります。そしてそれ以上は各個人、部全體の意嚮によつて解決されるべき所であると考へます

無題

豫三 瀬藤 俊雄

僕は反省することが好きである。凡ゆる機會を捕へて年の暮、學年末、シーズンオフ、部誌を書く時、或は一日の練習を終へて自分の生活態度といふものに鋭いメスが加へられる。

好きである。先輩の人が「ボールと戀愛しろ」と云はれたが私にはその心持が分るやうな氣がする。寝ても醒めても私の頭の中では、ボールがあちこちと飛んでゐる。歩いてゐる時でも何だかボールが、足の先にくつついてドリブルされてゐるやうな氣がする。

ボールをキックし、ドリブルして行く時の境地は實に何とも云はれない。殊に敵をうまくかもつた時とか、又インステップでジャストミートでびつたりとボールが當つて飛んだ時。かう考へてくると、今からでも直ぐに着替へて、ボールドへ行つて蹴りたい心持に驅られる。

感想

豫二 古賀文之介

四月合宿以來長いと思はれた春のシーズンも浦高戦を以て一先づ終つた。實に終つて了つたと云ふ感である。私には十日前の浦高戦を思ひ出す事は苦痛だ。最後まで押してゐた味方の勝戦を私の不覺から畫餅に歸せしめて

了つた不甲斐なさが浦高のグラウンドと共に頭に浮ぶ。秋の必勝を期すのみ。

夏休みも旬日の後に迫つてゐる。私は此の休暇を楽しみと危惧とに迎へざるを得ない。楽しみと云ふのは久しぶりに自由な時間を多く與へられる事である。危惧とは又春の様に観念的になりはせぬかと言ふ事である。長い休暇は部生活の反省を餘儀なくされる。そしてこの場合注意せねばならぬ事は久しくグラウンドを離れて部との具體的な交渉を中止する爲に運動部生活を自分から切り離して考へる事である。切り離さずともそれが一年半の私の生活であつたし又今後とも續けて行き度いと思ふにも拘らず、兎角その結果のみを見るに急になつてしまふのである。そして得る所の少きに自らの立場を疑ふに至る。勿論生活の批判は峻烈に行はねばならないし、安價な自己満足は斷然排さるべきである。しかし批判が單に懷疑に終る時非生産的にならざるを得ない。

我々は球を蹴る時無我の境地に浸れと云はれる。事實自分の全身を投げ出して唯球を一心に追ひ果ては球も意

識せぬ境地にまで精神を統一する（この場合この言葉は適當でないかも知れない）事は尊い事に違いない。そしてその様な氣持で總てに處して行けるなら行も極致に達したといはれやう。單に蹴球のみに限つたことではない。

しかし、もし我々がこの無我の境地を陶醉と解するならば甚しき誤まりともいはねばならない。物心一如の境は決してそのやうに甘いものではない。もしそれが陶醉なれば、それは餘りにも高價な肉體的時間的代價で支拂はれた遊戯、自慰といはねばならない。部生活はそんなに楽しい宙に浮いたものではなからう。

私はグラウンドに於る眞面目さをその儘自分の生活の總てに浸透させる事が如何に難いかを知つた。部生活は苦しい。その苦しみは到底試合に於る勝利等で償はれる様なものではない。自己に徹し全體に生きる苦行である。吾々は苦しくとも生きて行く爲に努力せねばならない。それが又義務でもあらう。（六月三十日記す）

反省の不足

豫二 安田興三郎

原稿の締切が迫つたので古い部誌を引繰返して見て居る中に、今迄餘り無考へに毎日の練習を送つて來た事に氣がついた。先輩諸兄の眞摯な努力に對し、深く心に省みて身の到らざるに赤面せざるを得ない。シーズン・オフよ早く來い、なんてのんべんとしてちやとても技術の上達は望めやしない。非常に僕には反省が缺けてゐた。

之は何もサッカーの練習に限つた事ではない。日常すべての事に於てさうである。朝起きて電車に乗つて學校に出て練習をして、又電車に乗つて家に歸つて寝る、毎日こんな判で押した様な事をして映畫を見る暇も無いとこぼすなんて何と滑稽な事だらう。「折々に遊ぶ暇はある人の暇無しとて文讀まぬかな」とは蓋し僕の事であらう。

何も氣の持ち様一つだ。二宮尊徳を見よ、リンカーンを見よ、話が大きくなつて來たが、とに角、電車の中で

も、休講の時間は退屈する程あるのに、それを利用しないでは誠に勿體ない話といふものだ。

全く反省といふものは人を益するものだが、その機會は仲々ないものである。この原稿は私に時間を費やさしめたが同時に私を反省させて呉れたのは嬉しい。

無題

豫二 西内碩男

春のシーズンは瞬間に過ぎ去つてしまつた。今あるものは一體何をしたのだといふ自責の念だけ。そして皆の人に迷惑をかけたことを思ふと、何んと云つてお詫をしたらよいか分らない。

唯あるのは此後の練習に於てだけだ。未だく長い部生活がある。これからこそ本當の部生活だ。

今はもう、唯これからだ、とだけ思つてゐます。

私の生活

豫二 白鳥義夫

兎に角、曲りなりにも一年間の部生活を送ってきた。初めはすべての方面に於て、唯新生活への期待といふ盲目的な力で、一氣に押切つて行かうとするやうな意氣で出發したが、斯様な空虚な進み方は忽ち現實の激しい流にぶつかり、自分の弱さにつけいられ、進むことが出来なくなり何となく面白くなつて焦燥の念に驅られた、そして部生活でも唯夢中になつてとつつかうとしてゐて何の味はひの無かつた蹴球することが、此頃では所謂面白いといふか、本當に好きになつてきたのである。

部と自分といふことを考へても、蹴球部が一人一人の單なる集りではなく、各個人のうち部が生きてゆき又さうなければ、この様に發展をたどることは出来ないのだと思ふ時、我々の一人一人の日々の生活が如何に重要な意義をもつものであるかといふことを自覺する。そこには眞摯な、そして私自らを導いてゆく充實した生活態度

なる生活意欲は失望を打開する。失望と憂愁とは進展の源泉となる。生きる事が眞の喜びである爲には生きる事の困難に對する失望と憂愁とが裏打ちされてゐる事が必要である。換言すれば、人は失望と憂愁とを生き抜いて行く時こそ又生活してゐると言はれる。そして一事一事に生きる事が必要である。

泣く事は尊い事である。泣ける者は幸福である。そして泣く場を有する者は尙更幸福である。

思索は重要なことではある。「考へる葦」であり「思ふ故に存在するもの」であると云つても、それは思索のみを意味しない。又論理はその思索の一つの道具たるに過ぎない。我々に必要なのは思索の道具だけではなくして、知情意以前に於ける我を掘り下げるべき道具である。

反省は極めて重要な事である。然し反省の内容は出来る限り繰り返へされない事が必要である。反省の結果が

が無ければならない。私はこの部生活の大道に決して誤りはないと信ずる。唯それを歩み続けるには途中に色々障碍も横たはるであらう。それにぶつかつても側道にそれないで正面からあつてそれを排除し徹底した生活を送つてゆきたい。

断 想

豫二 太田賢三

團體の中に自己を没入し、傳統の中に我を無にした時始めて團體に新らしい要素が加はり、傳統に新らしい方向が與へられる。個性が活かされる。

個性の發揮されてゐない人生は無意味な空虚なものである。個性の發揮は旺盛な生活力による。そして旺盛な生活力の發揮されるべき場が必要とされる。

意欲の缺けた生活には眞の失望はあり得ない。又旺盛實行に移されない時は此の過は犯され易い。意識せる生活とは實行の伴つた反省のある生活である。

何も身に附いてゐない自己を振り返つて見ると、一年生に戻りたいやうな氣がする自分である。一年間完く「球を蹴つて來た」の一事に盡きるが、之だけは自分のものである。そして蹴球部の中で考へ、笑ひ泣いて來た一年の思ひ出の種々は部に對する愛着の情を一入深くする。然し、今最も自分の胸を締めものものは「まだまだ自分甘い」といふ感じである。

休部の感

豫二 笠原龍平

提出期限はぎり／＼の處明日迄だと催促される迄筆をとり得ない筆不精故、執つた筆の思ふ様に動かないのが残念である。實際僕は筆不精である上、亦部生活について知つた様な顔をして喋々する資格はない程部生活の經

驗に乏しい。一年の人達は僕の顔等知らない位だらう。

然し僕に關する限り部の精神、特にグラウンドで練習をした時の氣持は、他の日常生活に我々豫科生活にアドプトしなければならぬ要素を多く有すると信ずる。僕が入部したのは時期外れの去年の十月であり、もう十月になると部の空氣も相當まとまつて居り、同級生が居るとは云へ、なか／＼氣分的にそ／＼はす、剩へ自信があつた筈の技術は案外駄目だと知り、本科生は優しくもあり冷淡でもある様に思へたり、これはいけないと思つて少し頑張ると體力の方も衰へてしまつた事を知る。斯うなると兎に角何でも彼でも自分に頼り、そして自分自身で叱咤しつつ練習して行くより仕方がないと思つた。

短い僕の練習期間に知つた事はたつたこれだけであるその後コンパ等で相當馴染んだが間もなく尿から蛋白質や糖分が出たり、體全身脚氣つぽかつたりして運動禁止といふ事になつた。

扱て團體を離れて獨りになると自己鞭撻は更に至難の業となる。健康に對する自信は失はれて行くし、自己の凡人振りには益々はつきりして来る。あゝ困つたものだとり合つた感じが出ない内に試合となり大失策をやつて一對一の引分となり本當に濟まなかつた。もつと／＼部に打込んで其の傳統にひたり精神を受繼いで今後精進しようと思ふ。

入部所感

豫一 助川 實

私は中學校の時にはサッカーをやつてゐなかつたが妙にサッカーに興味をもつてゐました。それで、商大にはいつて何よりサッカー部に入部したわけです。入つて見て部の空氣が如何にも明朗であり、本三から豫科一まで打解け切つてゐるのを見て、いゝ部に入つたものだと思ふ變喜んでゐます。私は毎日の練習を心から楽しんでやつてゐます。成程、苦しい時もありますが、それを頑張つて一日の練習を終へ部屋に歸る時の何とも言へぬ清々しい満足な氣持は、十分にその苦しさを補つて呉れると思ひます。私は練習時の無我無中の心境がたまらなく尊い

苦しむ日が多い。

現在僕は健康を恢復する事が主眼である。そして少し後れるかも知れないが再び運動場へ出られたら以前同様の御指導を希望する次第であります。

所感

豫一 松浦 巖

中學時代に蹴球部生活を送つて来て今度新しく商大蹴球部に入つた時、蹴球は自分も好きで親しんで来たが、大學の又豫科の部員選手の人々は一體どんな人達だらう、又どんな練習かしらと思ひながら始めて練習に出た時先づ其の丁重さに驚いた。而して日を経るに従つて學部豫科一緒くたになつて、其部員個人間の全く打解けた接觸凡てが中學校と異つて和やかに、紳士的であり、此の空氣の中に中學五年の時の重苦しい責任觀から放れた自由な氣持で本當に球を蹴らして貰へる嬉しさで一杯です。浦高戰の意義を何度も聞いても實は心の庭からびつた

ものと信じてやみません。

運動の爲、時にはしたい事も出来ない事もあるでせうが、然し私はそれ等の事は蹴球に徹する事によつて必ず補ひ得ると確信してゐます。

私はこの信念を以て今から六年間たゞひたすら球を蹴らうと思つてゐます。たゞ今後の精進あるのみです。

「僕は何を書かうぞ

してゐるのか」

豫一 内田清比佐

此の四月から兎に角商大蹴球部の末席を汚すことゝなつた。そして相當眞面目に（尤も専心とは云へないが）練習もして来た心算である。それは確かに氣持のいゝものであることも幸に知り得た。だのに、心の隅に時々、何やら飽き足らぬ淋しい感じがふつと浮いて来る事があるのはどうしたことか？ 實際僕は迷ひ子だつた！ 足下がしつかりしてゐない。更に云へば、信念を以てしてゐ

たのではなかつた。勿論、入部の當初は、希望と憧憬とを以て、勇躍この生活にとび込んだのであるが、その後の環境の豹變に漸く氣持もぐらついて來て疑惑の様なものも生じて來た。

豫一 遠藤 英一

生活といふ事から

はつきり言へば今も迷つてゐる。足下見がえない。然し目的だけは見失つてゐない心算だ。厭な感情は殺してこの路を歩みつゞけよう。唯その目的を目指して……然し又、試合後の緊張した感激!! それを味ふ毎に、何時までもくゞ此の雰圍氣の中に生きて行きたいといふ欲望を深めるばかりであつた。この時こそ、總てを忘れ得てゐた。だが一方、迷ひは反つてその爲に尙一層深刻化したのだつた。

乗り出した船だ、目的に嚮つて眞直ぐに進まう。そして、もまれるだけでもまれよう。

始めて経験したこの迷ひを假令六ヶ年の間にでも解き得れば、その時こそ僕の蹴球部生活は大いに意義があつたものとなるだらう。僕はそれを信じてゐる……迷ひの中でそれを信じてゐる。(六月二十一日午後一時十分)

我々が生活して行くことには、その各自の生活の底に何か確固たるものを持つて居ねばならぬのではなからうか。生活に核心のないものの生活には力がない。迫力のない、無意味な生活は我々は送つてはならないと思ひます。我々はこれからの豫科三年の生活、乃至六年の一橋の生活を眞に意義ある生活として行かなければならない。決して徒らに月日に翻弄されて夢中に生活してしまふやうな事のない様に祈つてゐるわけです。此處で私等は此の生活をして行くべき途と言ふか、そんなもの、撰擇に迷ふわけです。

我々の現在の生活……寮生としての生活あり、蹴球部員としての生活あり、クラスの員としての生活もあるわけです。我々は之等の生活の意義を味つて、確固たる生活をして行きたい。

僕等一年生は今迄二ヶ月半といふもの、蹴球をやつて

僕の言ひたい事

豫一 荒川 正三郎

來た。たゞ感ずることは各自が自分の生活の中に自ら融け込んで行くこと……本當に自分の生活を愛して自分の生活は自分の生きて行く記録であつて決して他人の生きて行く記録ではないといふ事をしつかりと考へて生活して行くことではないだらうか。本當に自分を投げ出して生活して行く。現在の自分は別に他にあるわけではなく現在の自分そのものこそ人生なのだといふ意氣込でやつて行きたいものだと思います。さうすれば自然と自分の生活への意欲も湧き、眞に力ある生活も開けること、思ひます。

蹴球部員としてはその部生活に於て。寮生としてはその寮生活に於て……

以上過去一學期の練習の事どもを色々と思ひ出しながら書きましたが、とに角この一學期の間蹴球部の良さに酔ひ得る事が出来る迄になつたのは全くの僕の幸ひである事を最後にお告げして筆をおきます。

今迄一度もボールを蹴つた事の無い僕が何故に蹴球部に入つたか、それは蹴球なる競技が或る魅力を私に對して有してゐたからである。たしか商業の三年位の時だつたらうと思ふが、明治神宮外苑競技場へヴァレーの試合をしに行つた時始めて蹴球の試合を見て非常な興味を感じた、青々とした芝生の上で球を追つて駆け廻つてゐる選手達の姿は壯快だつた、殊に大きくキツクしたりヘッディングをしたりしてゐるのを見るのは實に愉快であつた。それ以來學校の休み時間等に級の者を集めて小さなゴム球で蹴球の眞似事をよくやつたが、本式の球でやつた事はついぞなかつた。

此のやうに蹴球は僕に魅力のあつたのだから、僕が豫科入學に際して之を第一志望としたのも當然であらう。然し僕の入部前に二三の障害があつた事を此處に記さねばならない。先づ第一に身體の問題であつた。僕は當然

現在二年生であるべき筈なのである、といへばあまり唐突で變に聞えるかも知れないが、僕は去年體格検査で不合格となつた、それは胸部疾患によつてゝあつた。それで浪人一年は過激な運動は禁ぜられてゐた。そのやうな體の者が蹴球のやうなはげしい運動を選んだといふ事は家の人とか友人の忠告を無視しなければならなかつた事は云ふ迄もない。其れを無視して迄蹴球部に入つたのは前に言つた魅力が僕を動かしたに外ならない。

それから次に身體の問題ではなく學問の問題だつた。その事について始めて、そして深く考へたのは入寮の時の省線の中でゝあつた。その時兄が横に坐つてゐた。蹴球部へ入ると大分授業をサボらなければならぬから豫科の中は良いが本科に行つたら困るといふのだつた。僕は省線に揺られながら色々考へた入るか、入るまいかと。それでしやうがないから當分何部にも入らないといふ事にしてをいた。

所が寮へ入つてみると室長の西内さんが蹴球をやつてゐる、それで別に勧誘されたわけではないが急に蹴球部に入りたくなつて入つたわけである。

ひながら話せる日の早く來らん事を願つてゐる — 完 —

無題

豫一 五月女俊三

「ガタン」と大きく揺れて汽車が赤羽を出た。プラットホームが川のように流れて、ホームに居る人も後に押し流されて行く。ホームも見えなくなつた頃、汽車は單調な響を立て、田舎とも都會とも云へない様な住宅地を走つてゐる。今日は定めし混むだらうと思つてゐたが、車は自分と他の二、三人の客を乗せてゐるだけである。今、昨日までの自分の姿を思ひ出して見る。

胸を轟かして入學式に臨んだ事。それから部に勧誘されて、非常に迷つた事。で結局、蹴球部に入つたが、練習に餘り出なかつた事。やがて夏休になつて了つた事。等々を。

結局、自分の優柔不斷な事が、ひどく自分を責める。來るべき九月からはしつかりやらう。

入つてからの感想を言へば、簡單さうに思はれてゐた蹴球もなか／＼の技術が要るのに驚いた。それに驚く程蹴球部に對する知識がなかつたのだ。球を蹴るのは實に難かしい、僕は先づ足の當て所を教へられた、それでその通りやらうとしたがなか／＼うまく蹴れない、それで次には立足を置く位置と之に體重をかける事を教へられた、之に氣をつけてやらうとした、すると足の先で蹴つてゐたり、とんだ所で蹴つてゐたりした。それで又當て所に注意すると身體がうまくゆかないといふ具合にあつち立てればこつち立たず、こつち立てればあつちが立たないで困つた。個人技の方はそれでも此處と此處を注意すればいゝといふのであるが、時々マツチ等で或るポジションに置かれると實際千變萬化で、此の時はかう動けばいゝんだといふ確信が無いから、唯球につられてふらく／＼動くといふ有様だ。時々怒鳴られるとあゝ此の場合にはかう動くのかと分る位だ。僕の前途には知らなければならぬ事が洋々としてある。僕は今その洋々たる海に舟を乗り入れて彼岸に到るべく努力してゐる。そして「荒川は一年の時は球を蹴れなくて困つてゐたな」と笑

汽車は全く都會を離れた。青い水田が美しい。今まで學校へ行つたのは、家に歸るための様に思はれたほど、此の歸省といふ事を、待ちあぐんでゐたが、今となると昨日ほどの嬉しさを感じないのはどういふ譯だらう。

「家に歸りたくない」といふ心持が、家へと驅る心を壓へ附けて、頭の中に擴がり始めた。このまゝ歸つて了ふのが、何だか呆氣なく、又歸省といふ今迄の自分の最大の楽しみが、車の動揺する毎に、次第に消え様としてゐるのが、惜しい様な心持に襲はれた。

野を走り、林を縫ひ、鐵橋を渡り、汽車は走る。外の景色も見覚えがある。時計を見たら四時近くであつた。汽車は未だ高い太陽の暑い光を車内に乗せて、次第に吾が歸省地へ近づいて行く。

無題

豫一 高橋 三善

實に早いものである。つい此の間入學したと思つたら

三ヶ月は夢の様に過ぎ夏休が眼前に迫つてゐる。今唯一人机に向つて過去を振り返つて見ると三ヶ月間と云ふものは蹴球の二字に塗られてゐる。入學早々の事とて何かに落付かず只漠然と夏休迄送るのが誰一人知人の居ない僕に取つては當然さう有る可きだつたらうに、少なくとも三ヶ月間に送つた蹴球生活に依つて大いに得る處の有つた事を感謝してゐる。練習は決して樂なものとは云へないであらうが、疲れ切つた足を引きづつて西に傾く夕陽を一杯浴び乍ら寮に歸る時の何とも云はれない快感……總て苦の後には必ず光明があるのである。如何に苦しい事つらい事があらうと六年間蹴球を續けて行くつもりださて僕は出身は北海道なのであるがあまり北海道の良さが知られてゐない様なので次に少々北海道について書き、此後北の守り北海道をどしどし諸兄の訪ねられる事を希望する。北海道は上野から急行で札幌迄約一晝夜、汽車賃は急行券を入れて札幌迄約十一圓と思ふと大丈夫でせう。たゞし三等ですよ。津輕海峡では四時間半、あまり荒れる事はありません。冬は山の様に雪が降りますがそれも北海道の特色として大いに趣があるでせう。一歩外へ出ると一寸先の見えない様な吹雪の日でも眞赤に

燃えたストイプの側で本を讀む感じ如何にも落付いた北國ならではの味はへないものです。スキーは勿論七つ位の子供から相當の年の人迄します。山等では重要な交通機關の一ですから。長い冬が去り春風が吹き始めると函館の女子修道院、札幌の島松の丘には鈴蘭の花が一面に咲き亂れ美しい可憐な姿を見せて呉れます。僕の知つてる限りで北海道の名所としては函館附近の修道院、湯川温泉、大沼、小樽のオタモイ、スキー場として有名なニセコ、アカシヤの並木のある詩の都札幌。洞爺湖、他にあまり比類のない程湯の数の多い温泉郷登別、大雪、阿寒國立公園、神居古潭、層雲峽等でせう。車中から白樺の林が見え水田の規模の大なのを見ると如何にも北海道らしい感じがします。又旭川附近のアイヌ部落白老のアイヌ部落を訪ねてアイヌの様子を見、福山、江差等の未だ蝦夷と呼ばれて居た當時の中心地を訪ね現在の衰へた町に立つて當時の盛な様を思ひ浮べ蝦夷時代の北海道を追憶するのも亦價值のある事と思ひます。つまらない事を書きましたが、今後多くの人が北海道を訪ね眞の姿を知られん事を祈つて止みません。百聞は一見に如す。(終)



記 録

昭和十四年度戦績

○五月六日 豫科對東京高校 (練習試合)

於、東高グラウンド 先蹴東高 三時
 豫科 0 (00 00) 0 東高

大川	澤木	岡島地	田藤木上塚	9
居	宮村	吉水山	山瀬青淵藤	9
GK	FB	HB	FW	GK
高	淵中	井原平	橋林田山吉	0
東	田田	長平木	土小吉小住	1

○五月廿一日 (日) 對慶應 B・R・B (全日本綜合選手權大會關東豫選)

於、青山師範球場 十時慶應先蹴
 B・R・B 7 (43 01) 1 商大

大川	澤木	池中原	崎磨宮畑邊	7
吉	荒川堂	尾田笠	篠幡二小渡	4
GK	FB	HB	FW	GK
商	二階	鈴木早堀	井井岡山水	3
吉	荒階	鈴木早堀	櫻金松片清	3

先日迄の豫科との練習マッチに於て相當好調を思はせたFWもB・R・Bの卓越せる技術の前に完膚なき迄にシヤチボールを上げればバーに當つてはね返るを松岡之を鮮に極めたのみ。シュート数はB・R・B十三本、商大

GK	大澤	川堂	木野上	井井	瀨岡水	13	3	1
FB	商吉	荒二	鈴早淵	櫻金	菅松清			
HB								
FW								
GK								
CK								
FK								

合宿以來の疲勞未だ癒へず又グラウンドに馴れぬ爲ボールに對する感が悪く前半廿六分奥田のシュートにリードされ後半八分、九分に菊池、有馬と續けて入れられ、十七分清水のシュートにより一點返したが及ばず。

○九月廿三日(土)對一高戦(練習試合)

商大2(11)	11	2	1	高	木	尾上	山津林	谷岡	藤原上	引分
一	鈴	中大	井	平水小	澁藤	加田三	8	2	0	
GK	FB	HB	FW	GK	CK	FK				
大澤	川尾	木野上	井井	山岡水	3	6	1			
商吉	荒池	鈴早淵	櫻金	片松清						

一面の水びたしで所々に地面の見えるといふグラウンドではパスもキツタもなく唯ボールを浮べて押して行くといひ得ず大差をつけられる。

○十月八日(日)對帝國大學戦(リーグ第二戦)

商大1(10)	01	1	帝大	引分
大動	田山	石山部	屋木	池槻馬
帝岩	原大	力横長	大直	菊大有
12	8	2	11	
GK	FB	HB	FW	GK
CK	FK	shoot		
大澤	川堂	木野上	井井	山岡水
18	1	4	10	
商吉	荒二	鈴早淵	櫻金	片松清

此の試合は得點經過から見ると、前半十三分敵の左のC.K.が切れてそのまゝゴールインとなり、後半十四分ペナルティライン直前に得たF.K.を早野が極めた得點だけで凡々たる試合に見えるが、此の試合に於て商大の3F.Bの妙味を發揮し、後半同點としてからは殆ど押し切りであつたが、今一息といふ惜しい逸機等あつてタイムアップ。

○十一月五日(日)對早稻田大學(リーグ第三戦)

於、神宮競技場 二時 主審竹腰氏 商大先蹴

いふ様な試合であつた。然し相手方バックの潰しには學ぶべき點も多かつた。

○十月一日(日)對慶應大學(リーグ第一戦)

慶應7(52)	01	1	商大
應田	川崎	島中原	岐磨
慶津	石大	高田笠	志幡
18	8	5	
GK	FB	HB	FW
CK	FK		
大澤	川堂	木野上	井井
4	4	3	
商吉	荒二	鈴早淵	櫻金
			片松清

リーグの第一戦に強豪慶應を神宮の檜舞臺に之を迎へたが、後半の總攻撃に會つて前半の健闘報はれず第一戦を失ふ。卅分二宮がヘッドを競り勝つて前に浮かす所をフォロロした幡磨にそのまゝシュートされたが、卅九分片山の廿碼邊りからのロングシュートは鮮に決まり、同點になつたが。四十二分左C.K.のこぼれ球を幡磨にきめらる。後半は十分小畑、十三分幡磨、十六分二宮、卅分二宮、四十四分幡磨と得點を重ねられ、我軍一矢をも報

早大5(32) 00 0 商大

大田	田田	宅岡村	西橋	邊林
早島	織莊	三末西	河高	渡中
7	9	6	12	
GK	FB	HB	FW	GK
CK	FK	shoot		
大澤	川堂	木野上	井井	山岡水
21	2	13	4	
商吉	荒二	鈴早淵	櫻金	片松清

一ヶ月餘りの期間を得て望んだ試合も、何等手の施す術を忘れたかの如くに敗れ去つた。前二試合に比して餘りにもかけ離れて劣つた試合振りであつた。

○十一月十九日(日)對明治大學戦(リーグ第四戦)

於、帝大球場 主審笹野 明大先蹴

商大4(22)	02	2	明大
大邊	田野	中島	田岡
明渡	田生	田中	南
16	6	6	13
GK	FB	HB	FW
CK	FK	shoot	
大澤	川堂	木野上	井井
17	2	6	0
商吉	荒二	鈴早淵	櫻金
			片松清

前半十八分櫻井の縦パスを片山受けてそのままシュートが右隅を破る。廿五分にベナルテイーを取られ中島に極められる。續いて卅三分逆襲から竹内―片岡と渡り片岡に極められたが、卅五分清水のセンターリングを金井へツディングで入れて同点とす。後半廿分迄は全然球が我軍にわたらず、氣のない押され通しの試合を續けたが、廿三分逆襲より金井―櫻井―金井―片山と渡り片山の右からのシュートは左下隅に綺麗にきまり、續いて卅一分左C・Kを片山へツディングで入れる。その後一時危かつたがよく守り切つて快勝す。

○十一月廿五日(土)對農業大學戰(リーグ第五戰)

於、東伏見 主審高山(忠)氏 農大先蹴

商大 I (01 10) I 農大	大部 藤田 坂樫内	成 藤 李 尹 松	
	農 磯 佐吉 穂富武	佐 小	19 5 3 5
	GK FB HB FW	GK GK FK shoot	
大澤 川堂 木尾上 井井山岡水	15 8 5 19		
商吉 荒二 鈴池淵 綱金片松清			

グスピリットが表はれ、技術的には敵に劣つては居たものの、勝利は決して偶然のものではなかつた。

○十二月廿四日(日)對神戸商大戦(三商大リーグ)

於、帝大球場 主審菊池氏

東京 I (01 00) 0 神戸	神戸 上 垣森 津崎柳 井澤崎井豊	
	神 稻 稲大 島尾青 永戸塩藤飯	24 2 6 3
	GK FB HB FW	GK GK FK shoot
東京 澤 川尾 木野尾 井井山岡水	11 7 5 15	
東 吉 荒池 鈴早堀 櫻金片松清		

前半五分櫻井のシュートによる一點が結局最後迄物を云ひ、我軍チャンスはあるも得點追加出來ず、一〇にて勝つ。

○十二月廿五日(月)對大阪商大戦(三商大リーグ)

於、帝大 主審吉田氏(帝大) 東京先蹴

東京 II (74 00) 0 大阪	阪 志 村田 田田田 崎利友野村	
	大 貴 松津 榑永松 岡毛金佐野	33 5 5 2

二部陥落確定の農大との最終戦は前日迄の雨でグラウンドはすべり球が重くなり出足伴はず僅に前半四十一分金井のシュートによりリードするも、後半直後のC・Fのフリーシュートに同点とされ、その後ずつと壓迫するもきまらず遂に第四位となる。

本年のリーグ戦の順序は1慶、2早、3帝、4商、5明、6農で二部優勝技文理大が農大と入れ替る事になつた。

○十二月九日(土)豫科對浦高校戦(定期戦)

於、小平 主審吉田氏(帝大) 商大先蹴

商大 3 (12 00) 0 浦和	浦和 塚 島瀬 尾田藤 森本田川村	
	浦 石 小 長 濱 佐 宮河種山野	11 8 4 7
	GK FB HB FW	GK GK FK shoot
大 川 内 澤 島 木 賀 田 藤 木 上 塚	12 2 2 7	
商 居 西 宮 水 村 古 安 瀬 青 淵 藤		

前半十五分、卅分何れも青木のシュートにより、後半卅一分淵上の一撃と加へて三點を上げ敵を遂にノットゴールに終はらしめ、此所に久し振りに快勝を博したのである。此の日の豫科のチームには積極的なるファイティン

京 森 川 尾 木 野 尾 瀬 井 山 岡 水	4 12 5 55
東 狩 荒 池 鈴 早 堀 菅 金 片 松 清	

術技の格段の相違で殆ど問題にならず、我軍最後迄だれず着々と點を重ね十一點の大量得點を以て快勝を博した。

此所に久し振りにて三商大リーグに優勝して昭和十四年度の試合を全部終る

以上總試合十九試合

勝	七
負	八
引分	四

(内譯)全一橋軍 三勝四敗三分

豫科	一勝四敗一分
本科	二勝
二軍	一勝

又得點から見ると

總得點 四十二―四十五で負

全一橋	廿二—廿八	で負
豫科	七—十七	同
本科	十二—〇	で勝
二軍	一—〇	同

昭和十五年度戦績

○四月廿五日(日) 對文理大戦(練習試合)

於、小平 二時 文理大先蹴

商大1() 1 文理大

大島	澤藤	井浦村	部林永藤原	13
飯佐	安松中	高小松近神	5	3
大川	川島	木野上	木井山岡田	9
居	荒水	銀早淵	青金片松吉	2
				3

春の合宿來の始めての練習試合も未だ調子揃はず引分に終る。

○四月廿九日(?) 對早大W.M.W 戦(綜合選手権關東)

豫選)

高不破	山平	川中木	野田井岡原	11
小紀	並田青	矢吉長藤上	2	5
大田	田賀	屋浦鳥	田藤木藤橋	9
内	太古	土松白	安遠青瀬高	1
				3

豫科の新編成メンバーの始めての試合も昨年と同じく引分に終つた。

○五月十七日(金) 對帝大戦(練習試合)

於、帝大球場 商大先蹴

帝大3(03 00) 0 商大

大野	田部	石山馬	池木野間谷	8
濱	原長	力横有	菊直天笹大	2
				3
				10

GK	8
CK	3
FK	6
shoot	4

大川	川島	木野上	田井山岡水	8
居	荒水	鈴早淵	吉金片松清	3
				6
				4

本科のみの編成チームで對戦したが結局一點も突込み得ず敗退す。

○五月廿一日(火) 豫科對法政豫科(豫科リーグ)

於、青山師範球場 商大先三

W.M.W 3 (1002 0002) 2 商大

田川野	原岡島	谷本橋納	13
石矢	立末川	米川高加	12
			2
			16

GK	18
CK	3
FK	1
shoot	6

大川	川島	木野上	木井山岡田	18
居	荒水	鈴早淵	青金片松吉	3
				1
				6

前半二分早くも金井のクリーンシュートにより一點先取したが十一分高機のロングシュートは○Kの手をかすめて入り續いて十七分CKより川本のシュートにより逆リードされたが廿三分敵バックのミスに乗じて片山のフリーシュートにより同點にしたが、後半は兩軍共動きが鈍くなり、得點なく延長戦となり、後半にゴール前の混戦から遂に一點を許し惜敗した。

○五月十一日(土) 豫科對東京高校戦(練習試合)

於、東高球場

商大1(10 10) 1 東高

於、小平

商大4(13 00) 0 法政

政田	森	山野	田部井野賀	18
法吉	藤	横矢	增阿櫻熊志	3
				4
				0

GK	5
CK	5
FK	2
shoot	23

大田	田賀	屋浦鳥	田藤木藤橋	5
内	太古	土松白	安遠青瀬高	5
				2
				23

豫科軍必勝の意氣淒く、殆で相手にせず一方的に試合を進めて勝つ。(石割記)

名簿錄

編輯部調査

部長 佐藤 弘教授
 豫科部長 岩田 巖教授

役員
 主將 早野 廣太郎 (本三)
 委員長 折下 章 (本二)
 會計委員長 吉田 富彦 (本三)
 豫科主將 青木 育郎 (豫三)
 豫科委員長 瀬藤 俊雄 (豫三)

先輩

（右任務先所）

大正十四年度卒業
 進藤 靜太郎
 兵庫縣武庫郡住吉村反高林一、八七六
 （電 御影 五、六七八）
 大阪市北區東梅田町二八、プリミヤハ
 ウス合資會社進藤商店（電 北二、〇三九）

大正十五年

松本 正雄
 杉並區西高井戸一ノ一三九
 東京市京橋區銀座西一丁目實業ビル内
 松本法律事務所（電 京橋六、〇八六）

川村 通
 世田谷區東玉川町二
 （電 田園調布二、八三五）

昭和二年

高橋 朝次郎
 麻布區廣尾町五九
 麒麟麥酒株式會社（電 京橋六、一一一）

明石 毅
 大阪市北區南扇町五
 大阪瓦斯株式會社北營業所長（電 南二、〇）

昭和三年

猪瀬 辨一郎
 杉並區馬橋一ノ三七（三浦方）
 三宅 弘方
 仙臺市南町通一
 日本油脂株式會社東北營業部
 仙臺市南町通一

昭和四年

瀬社 家力
 小石川區小日向臺町一ノ六四
 日本ピストンリング株式會社

昭和五年

渡邊 甚吉
 芝區白金三光町二七三
 有隣生命保險株式會社

城島 鎮雄
 豐島區長崎仲町二ノ三、六五八
 鷗商會（電 丸内、五、三二二）

伊藤 健吉
 大森區馬込東一ノ一、〇八四

森 綠
 名古屋市港區稻永新田字ヨ六七五
 金城工業株式會社

近藤 豐太郎
 牛込區津久土町二（自營）

昭和六年

豐田 達治
 北支派遣軍井出部隊氣付惠藤部隊番吉

平松 宣夫
 麴町區紀尾井町六
 株式會社三越本店

昭和七年

西川 善一
 滿洲國新京錦町二ノ十
 滿洲炭鐵株式會社人事課

高橋 啓一郎
 豐島區巢鴨六ノ一、二二一
 丸之内海上ビル新館旭石油株式會社

高橋 重彌
 四谷區南寺町四（電 四谷九七九）
 明治生命保險株式會社營業部
 （電 丸ノ内、〇〇一）大專用銀座四九一

清水 元章
 本郷區湯島天神町一ノ六六（電 下谷五五六）

小林 昌一
 小石川區高田老松町一七
 片倉製絲

昭和八年

西田 嘉兵衛
 麴町區一番町一五、一ノ六
 西田嘉兵衛商店（電 浪花二、五六一五）

勝田 一郎
赤坂區二表町二ノ一

橋本 林三
世田谷區玉川與澤町二丁目一、〇〇四
古河合名株式會社

吉村 豐三
世田谷區代田一ノ六五二
株式會社 高田商會

二階堂 謹司
支那派遣軍總司令部氣付滿川部隊渡邊
部本部 菱商事 東京本店

後藤 博基
大連市山縣通一六五
滿洲特産專管公社大連支社

水島 茂
三 菱商事
e/o Mr. T. Miyake
Casilla 69-D. Santiago. Chile

神野 光司
北支派遣第一野戰郵便局氣付木下部隊
吉武(喜)部隊 (神野清一郎)

重見 敏之
南洋群島パラオ島コロール島南拓内
南洋拓殖株式會社

林田 毅
兼松商
滿洲國派遣牡丹江省大城子軍事郵便局
付武內部隊 奧中隊 幹候班

村井 恒典
世田谷區玉川與澤二ノ五四七
三井物産(電)田調布二、六九〇
中支派遣園部部隊湯野川部隊經理部見
習士官

後藤 虎雄
平塚市本町三ノ七〇九

岩崎 寬貞
牡丹江省赤澤部隊氣付松田隊加藤隊
三 菱商事 名古屋支店

小西 正夫
兵庫縣武庫郡本山村六一〇
大阪市東區南久太郎町八木商店

米山大三
豐島區池袋五ノ二二一〇
三 菱商事株式會社船舶部

昭和十二年

淺枝 彦太郎
滿洲國海拉爾、白濱部隊、佐藤隊
朝鮮無煙炭株式會社

田島 輝重
熊本市大江町步兵第十三聯隊第八中隊
東京器械株式會社

角田 昇
北支派遣軍梅津部隊本部經理部
三 菱商事 東京本店

森田 昭之
北支派遣軍木村部隊氣付、櫻井部隊、
町田部隊
三井 鑛山三池支店
枝村 藤三郎
日黑區下日黑三ノ四九八

鈴木 彰
朝鮮平安南道鎮南浦
日本鑛業鎮南浦製鍊所

大掛 隆久
豐島區堀之内町三
三 菱商事 東京本店

淺田 暉
臺灣高雄州屏東市屏東十一
臺灣製糖株式會社
(英三改)

二階堂 晴三
豐島區巢鴨二ノ五三思齋寮内
三 菱商事

池尾 隆二
王子 子製紙

菅 瀨十朗
北支派遣井出部隊氣付惠藤部隊
岡野部隊 仲田

狩 森正雄
小石川區久堅町七
三 菱商事

府下 吉祥寺五六七(吉祥寺四一八)
三 菱商事 人課

◇在學者姓名

() 内ハ出身校 () 右 現住所
左 歸省地

本科三年

(神戸一中)

金井 雄吉

杉並區阿佐ヶ谷二ノ五九五 新居方
神戸市灘區篠原本町一ノ三二二
(電) 御影六、二三四

(神戸一中)
堀尾 貞一
杉並區上荻窪二ノ三三電(荻窪四二二)

兵庫之和田町三丁目
神戶製糖所
八幡町一ノ三八
五社文化会

荒川守之助

杉並區天沼一ノ二〇秋葉方
柄木縣宇都宮市大町二三電宇都宮三三

(五中) 早野廣太郎
小石川區丸山町二(電大塚七九三一)

(神戸一中) 吉田富彦
杉並區天沼一ノ二〇秋葉方
神戸市灘區高羽楠丘一〇八

(開成中) 石割知之
杉並區高圓寺三ノ二一八

(八中) 清水睦
澁谷區圓山町三

(飯田中) 吉澤貞雄
杉並區馬橋三ノ二九八信陽舎
長野縣飯田町知久町二

(五中) 高橋道太郎
小石川區指ヶ谷町二(小石川三八二七)

(一本中) 鈴木英二
杉並區馬橋二ノ一七〇(中野二七七三)

(廣一中) 片山光夫
杉並區阿佐ヶ谷三ノ五一〇三木方
廣島市河原町九

(宇都宮中) 山田久寧
杉並區天沼一ノ二〇秋葉方
福岡縣小倉市上富野四〇一

(神戸高商) 岡義文
中野區上高田一ノ九田原方
兵庫縣明石郡垂水町仲田(舞子三六八)

(一本中) 青木育郎
澁谷區千駄ヶ谷一ノ五六二

(一本中) 瀬藤俊雄
世田區北澤四ノ五〇三

(神戸一中) 吉岡敏夫
一橋察
神戸市葦合區熊内道一ノ三三

(浦和中) 土屋五郎
浦和市高砂町四ノ一六五

(府一商) 太田賢三
小石川區指ヶ谷町一三七

(府二中) 白鳥義夫
杉並區阿佐ヶ谷四ノ四五四

(神戸一中) 山地鴻
神戸市灘區八幡町二ノ六五

(八中) 松岡義彦
澁谷區榮通一ノ三五(澁谷三七四五)

(四中) 折下章
杉並區清水町二〇〇

(神戸一中) 山本孝次
杉並區荻窪二ノ一二八(舊姓櫻井)

(五中) 藤塚亮策
神田區五軒町四八

(廣島一中) 居川達一
府下吉祥寺一ノ八八四藤本方
臺灣基隆市壽町三ノ五(電五〇六)

(二本中) 淵上明
八王寺市萬町一三八

(濱松一中) 水島行
中野區宮園通五ノ四四豊山莊
濱松市名殘町三六〇

(大阪高津中) 村木杉太郎
府下吉祥寺二七二九

(辰代中) 宮澤力
世田區代田二ノ七六一
長野縣埴科郡西條村三七五一

(豊中中) 鷺野和夫
杉並區馬橋二ノ一九〇瀬能方
奉天市大和區藤浪町一八

(府一中) 古賀文之介
世田區北澤四ノ四一三

(麻布中) 安田興三郎
大森區雪ヶ谷町八六八

(仙臺二中) 西内碩男
仙臺市南町通一〇

(府立二中) 笠原龍平
中野區大和町八

(神戸一中) 松浦巖
西宮市千歲町八(西宮三七八四)

(神戸一中) 助川實
一橋察
名古屋市東區元柳原町三ノ八ノ一

(神戸一中) 内田清比佐
兵庫縣武庫郡鳴尾號下川綠七ノ四五

(神戸一中) 内田清比佐
兵庫縣武庫郡鳴尾號下川綠七ノ四五

(刈谷中)

遠藤英一

編輯後記

滿洲國新京祝町一ノ一六號宇都宮方
愛知縣碧海郡大濱町上之切

(府立三商)

荒川正三郎

深川橋寮
深川區木場四ノ二ノ二〇(深川五三)

(宇都宮中)

五月女俊三

宇都宮市橋田町四二(三三五一)

(札幌一中)

高橋三善

北海道岩内郡御鉾内町六五

われ／＼の「部誌」は單に文藝的趣味を發揮する爲のものではない。自己の蹴球部生活の反省から生れる眞摯な聲でなければならぬ。

部生活を通じて生成して行く自己——それは必ずしも一直線的な進歩ではないが——の、その時々々の姿である蹴球をしてゐて何物かを得たと感ずる、その何物か、眞に何であるかを究めようとする努力の表れである。その意味で、それは眞の藝術とも言へる。

グラウンドに於ける練習と「部誌」に於ける反省とが相俟つて吾々の部生活を成すのでなければならぬ。

全部員必ず書くやうに、と言ふのも、お座なりなことを書いて名前だけ揃へたいから、といふのではない。各自の眞摯な反省の心を求めるのである。

未経験の仕事で、色々不備な點の多いことは誠に申譯けないと思つてゐます。

終りに先輩諸兄、殊に深尾大先輩から原稿を頂いたことに對し厚く感謝の意を表します。

(高橋)

昭和十六年一月二十五日
昭和十六年一月二十八日

印刷
發行

〔非賣品〕

編輯兼
發行人
東京商科大學内
高橋道太郎

印刷所
印刷人
東京府下府中町九八六一
萩原清雄

發行所

東京商大蹴球部